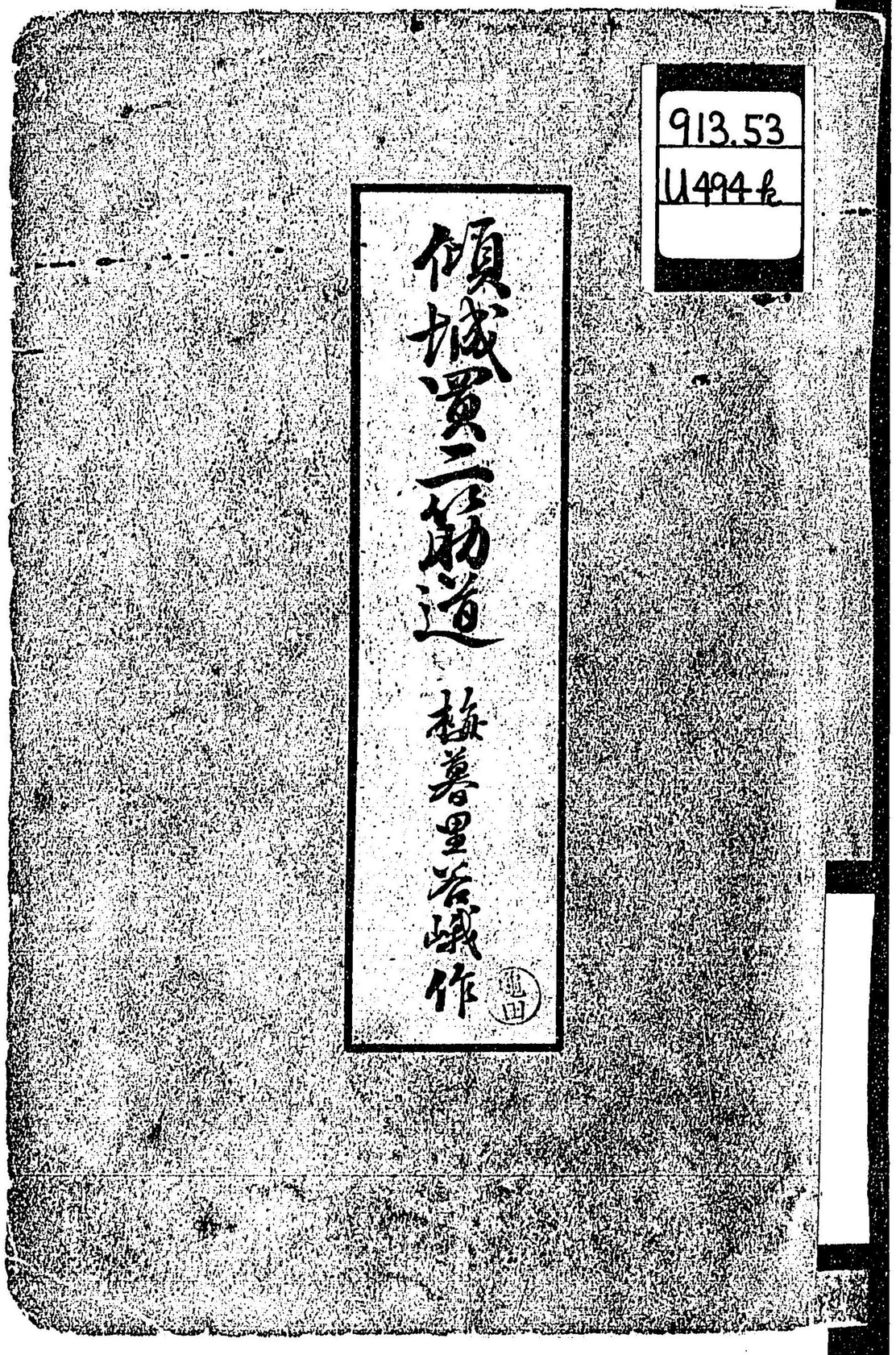

913.53
U494k

089314-000-4

913.53-U494k

傾城買二筋道

梅暮里　谷峨／著

M24

DBM-0695

梅暮里谷峨作

傾城買二筋道

全三冊
合卷

發兌書肆 丸善書店
叢書閣

913.53 U494k

緒言

兎に角に愛情の世なり。賢不賢善不善、人は常に和合せん事を望む、反性のものも異質の者も、不快の節も嫌厭の時も。憂患苦惱逸興歡樂、鼠騷ぐにつけ猫啼くにつけ自然の傾向は物の哀れをぞ知らむ。

老子は大道に狂し、莊周は齊物に忘れ、兼好は詫住居に樂み、地黃坊は酒盃に溺る。是もまた戀なれや。須田に迷ひしやさしの狂女は「子を尋ぬるも思ひは同じ戀路なれば」と都鳥に言問ひしが、人界に充溢せる愛情は森羅萬象にして、特に男女の間に熱焰するもの是を戀情と云ふ。

白河樂翁公歌あり、曰く「つくづくと獨り向へば我身さへ月の中なる心地こそすれ」と。這箇一句能く進みたる戀を說盡せり。「たゞ名字こそ敵なれ名字は御身の手にも足にも腕

国立国会図書館
29. 7. 22
337036

にも顔にもあらぬものを」とシュリエッタの染り出せし一ト言も淺墓なる嗚呼の徒の知るべき事かは。

若し小説が人情を解剖するものならんには、外界と內界との不合を調理すべき緩和劑を觀過するを得ざれば源氏物語以來近く淺尾岩切眞實競（東京繪入新聞の續きもの）に到るまで我國の作家は唯男女の戀のみを主眼として偏更其實相を寫さん事を勤めたりき。さるも作家の識素より高からねばお染久松米八丹次郎等悉皆卑近淺膚のものならざるはなく、是を戀にあらずと斷じがたきも、古今の情通シェークスピーヤが百五十餘篇の小詩に咏せし戀の皮相だに描かざりき。誰か鈍くも戀を利己的なりと曰ふものぞ。利己的の戀は幼稚なる作家の謬想にして戀は畢竟一身の私慾を逞ふするものにあらず。

外界の壓抑愈々加はるに從つて內界の情緒益々纏綿交錯して一樣の規矩をもて判すべからず。さるに我國の作家常に同一の材料に同一の潤色を爲し千篇一律の嘲を免かれざるもの畢竟觀察眼の至鈍なるに依れり。此故に人口に膾炙せる古今の情話（ラヴ・ストーリー）を集めて皆仝一揆、男は丹次郎、女はお長にあらずんば米八、未だ清玄、意久、玉圓、岩藤等を以て色男たり又色女たるを許さず。偶々院本稗史に於て英雄君子兒漢俠物が不思義にも艶冶郎たりと雖とも、艶冶郎たるの間は英雄君子兒漢俠物の實を失ふて悉く優柔なる丹次郎と化し了す。作家の眼光到底其以上の人物に及ばざるなり。

我等素より日本の狹小なる詩界に於て沙翁またギョーテ等千載屈指の作家が物したる傑品を求むるにあらで、其二流の作家が抱懷せし戀に對する觀念を欲するも又得るを

難んず。獨り是を昔日に得るを難しとするのみにあらで、俊才の頻々輩出する現代に望むも又僅に數ふべし。沙翁の所謂「荒浪に漂ふ船を案内する明星」は知らで、刹那變化のあやふやなる Time's fool (一時の痴情)を戀と考ふるぞ嗚呼なる。戀は金剛不壞にして積る月日に深くこそなれ、炎陽耀くも鋒及きらめくも消ふる事あらむ。覺めて悔しきは戀にあらず、盡て嬉しきは戀にあらず。古き歌に、

"Kind is my love today, to-morrow kind,
Still constant in a wondrous excellence."

とあるは此道の聖の言の葉ならめ。さるにても我國の作家は深く此言を悟りしもの無かりしが如くかの寫實派に類する爲永亞流皆極めて卑むべき痴情を寫して絶て戀の實相を知らざりき。唯是等の紛々たる雜籍の間に二作の頗る

美はしきを認む。一を娘節用、能く人の知る處なり。他は即ち梅暮里谷峨の傾城買二筋道是なり。

二筋道の主人公文里は丹治郎的艶冶郎にあらで男振醜く年も三十を越せし分別盛りの女房持にて權が「まァ能くあいつが面を見や疱瘡跡だらけではんとうの顔はちッとばかりはつちやァ出てはいねェぜそして女房子迄あつてずつは敢果ねェ裏店住居の喰ふや喰はずのお旦那樣だぜ」と喇りしも虚僞ならで不男にも女房持にも裏店住居にも換へがたき滿腔の實情は初め執拗にも嫌惡せし一重を脆くも彼の前に折服せしむ。彼れ毫も其慮なくして一圖に愛念を焔して全く自己の嫌厭せらるゝを忘れ唯一重の爲に實義と誠を犧牲にするの外他意なくして終に知らず知らざる間に他と我を一圖にするを得たりき。

若し細かに穿鑿すれば文里未だ愛他の爲に全く自己を犧牲にせしにあらず。初編冬の床、文里訣別の異見に「人の上にたつ者は人に指をさいれねェ樣にしねェきやァならぬ」とあるは最も能く文里自身を告白せし言にて是を思へば斯く迄に嫌はれし女に眞實を吐きしも愛念の熱せしにあらで人に後指さいれん事を恐れしにあらざるか。されば一重が慚愧して熱涙に咽ぶを見て冷かにも江戸節を唄ひ、交情既に温まりて肚裏一介の猜疑を留めざる時猶ほ一些事に觸れて忽ちに嫉妬を焔し毒言を吐て共に爭ひ、己が爲に手管を綾なす女の苦心を悟らで障越に聞へよがしに歸る〳〵と厭味を並べしも怪むに足らず。嫌はられし時は切に体面を粧ふて其不平を現さず胸中微塵の卑情を蓄へざる如く飾り終ふせしも然も首尾能く愛を買得し曉には軟弱無力

にして嫉妬を焔し愚痴を吐くに到る。彼れ素よりヴハニアの高義セルヲエイの深慮に遠く及ばざるなり。若し境遇を仝ふせば五郎と爲らむ、權と爲らむ。唯地位を異にして一は大通一は半可の感あるのみ。

然れども若し文里を以て藤兵衛丹次郎治兵衛德兵衛に比せば如何。初篇冬の床、一重に無愛想を並べられて靜かに「成はぢ十七八の時分はおかしくもねェ事に笑つたり何でもねェ事に腹を立つものヨまァ〳〵ぢふとも氣儘がいい。然し風をひかふせ羽織でも着て居ればいい」と云ひ、また其末段に「ハテ好いた男は稀にしていやな男の多ければこそ苦界と云ふもの其處を隨分辛抱して蔭ながらいい耳をきいてエまたこんな惚ひ句を言て氣にあたらば堪忍しな」或は「是は改たまッた腹を立つ位なら今迄人の口端にかゝッて

來はしねェが其やうにいやがるものを便々と來たはおれが罪だッけヨ」と振付けし女を慰めしなど毫釐利己を含まざる實情の溢れし果なり。腦裡の錯雜胸中の苦悶豈に他の作家が筆に現はれしもの、比ならんや。

一言に評すれば二筋道は實情の爭鬪なり。文里一重は素より女房お時、姉女郎九重、朋輩吉野、初瀬路、新造花の香、三浦屋主人等悉く實義の塊物。其間に五郎、權等を點出し是と反應して互に實義を盡し、一方の實義は他の實義と衝突して憂患煩悶を生じ是が爲に內界の痛苦を起して悲壯に陷るの運命を寫す。外界の刺戟薄ふして唯內界の刺戟に逼られて失墜するの行路、社會人事總て辿らざるはなし。谷峨の眼光鋭利にして着意の深密なる紛々たる群小說に見るを得ざるなり。

享和二年の花、折、紙、(戲作評判記)に二筋道を位付して僅に上吉を與ふ。畢竟撰者一定の見解なく單に自家の嗜好を以て批判せしなれば其妥當を缺くも當然なり。當時最も重せられし京傳の諸作總雛絹麗等は一種微妙の嘲罵的諷誡文字なれど谷峨の美は爰に存せずして却て深く人情の秘奧を穿てり、豈に輕々しく軒輊するを得んや。

蓋し當時の風習として夫の「ライト、リテレチユア」に屬するものは眞摯なる和歌詩文すら彫蟲の技なりと斥けられ、所謂經學者を以て任ずる旨目腐儒の痛く賤みし處なるをもて、此旨目腐儒に師事せし一般の社會は毫も重きを歌人詩學者に置かざりき。況してや俳諧戲作の壇上に游ぶものは、偶々源內の亞流ありと雖ども、大抵自ら卑屈に甘んじて游戲文字の名目に安んじ、狂文狂歌に瑣々たる字句の巧妙を

來はしねェが其やうにいやがるものを便々と來たはおれが罪だッけヨ」と振付けし女を慰めしなど毫釐利己を含まざる實情の溢れし果なり。腦裡の錯雜胸中の苦悶豈に他の作家が筆に現はれしもの、比ならんや。

一言に評すれば二筋道は實情の爭鬪なり。文里一重は素より女房お時、姉女郎九重、朋輩吉野、初瀬路、新造花の香、三浦屋主人等悉く實義の塊物。其間に五郎、權等を點出し是と反應して互に實義を盡し、一方の實義は他の實義と衝突して憂患煩悶を生じ是が爲に內界の痛苦を起して悲壯に陷るの運命を寫す。外界の刺戟薄ふして唯內界の刺戟に逼られて失墜するの行路、社會人事總て迚らざるはなし。谷峨の眼光鋭利にして着意の深密なる紛々たる群小說に見るを得ざるなり。

享和二年の花、折、紙、(戯作評判記)に二筋道を位付して僅に上吉を與ふ。畢竟撰者一定の見解なく單に自家の嗜好を以て批判せしなれば其妥當を缺くも當然なり。當時最も重せられし京傳の諸作總籬絹麓等は一種微妙の嘲罵的諷誡文字なれど谷峨の美は爰に存せずして却て深く人情の秘奥を穿てり、豈に輕々しく軒輊するを得んや。

蓋し當時の風習として夫の「ライト、リテレチユア」に屬するものは眞摯なる和歌詩文すら彫蟲の技なりと斥けられ、所謂經學者を以て任ずる盲目腐儒の痛く賤みし處なるをもて、此盲目腐儒に師事せし一般の社會は毫も重きを歌人詩學者に置かざりき。況してや俳諧戯作の壇上に游ぶものは、偶々源內の亞流ありと雖ども、大抵自ら卑屈に甘んじて游戯文字の名目に安んじ、狂文狂歌に瑣々たる字句の巧妙を

現示するを生平の能事と爲し、ちらしの趣向引札の立案に斬新なる意匠と詼諧文字を羅列して淺薄なる江湖の喝采を貪りて揚々得意たるが如し。此故に這般游戯的機智に富める者にあらずんば世間の評判を博する事は素より難く、其輩の間に推奬せらるゝ事能はず。黄表紙と云ひ洒落本と云ひ狂文狂歌俳句川柳皆字句の巧拙に依て勝敗を制するの勢にして、全交が、喜三二が、京傳若くは三馬が世を噪がせしも生平の文字寧ろ其因を爲したるなり。

氣の毒なる哉、梅暮里谷峨は最も文字に拙なるの人なりし。彼は洒落本の外に一篇の狂文一首の狂歌をだに殘さゞりしが、否な瑣々たる字句の巧妙を爭ふの機智を有せざりし故に生前京傳三馬と雁行するを得ざりしが、抑も彼が此機智を蓄へずして縱令花折紙に不妥なる批評を受けしも二

筋道の一般社會に歡迎せられしは又彼が常班に超越したるを證するに足らむ。

谷峨別に數種の作あり、未だ全く可ならず。唯二筋道に到つては我國稀に見る處なり。爰に我等喜んで此名作を江湖有識の士に推薦せむ。

卯の六月

發行者　識

凡例

一梅暮里谷峨は久留理侯の藩士にして通稱を反町與左衛門と云ふ文政四年九月中七十餘歳にて歿す墓は麻布狸穴曹溪寺にあり法名を乘蓮居士と云ふ

一傾城買二筋道は寛政十年の開板。案ずるに初めより全篇の立案なかりしが世評高かりしかば引續き二篇三篇を著はせしならんか殊に三篇に於て其痕跡の歴然たるを覺ふ

一二筋道後篇及三篇總て三卷合して一冊と

傾城買二筋道目錄

前篇

○夏の床　五頁
○冬の床　十四頁

後篇

○第一　信宿の生疑　三十三頁
○第二　將暮の愚鹵　四十六頁
○第三　功計の赤心　四十九頁
○第四　任俠の寸丹　五十九頁
○第五　離愛の夢飛　六十七頁

三篇

爲す

一原本誤字脫字頗る多し殊にまゝ疑ふ點あるを以て校正に苦みしも杜撰なほ免かれざれば再板の節更に訂す處あらむ

發行者識

目錄終

○第一　冬のだん　七十五頁
○第二　夏のだん　八十四頁
○第三　秋のだん　百四頁
○第四　春のだん　百十二頁

序

孝行に賣れ不孝に受出され、とは實に川柳點の妙なるかな。虛と實の中街通と不通を汲頒て。意氣路を磨く心の駒下駄。いやな風には蹴出褄の外八文字ふるも有り。又照とは茶屋が軒端の燈灯か。其蠟燭の流れの身。辛氣辛苦の苦界十年。たとへ一文が鐵漿を買ふとも豈千金を尊しとせん。てれん手管の長文を見せ雅裯の音色に連て。通ひ廓の裏茶樓まで。娼婆もおよばぬ穴を探して。粋を味はふ梅暮里谷峨子。嗚呼其才の高きこと水道尻の火見櫓も足下に低く。筆頭の走れる事南一の曾駕も遲しとせん。不佞此書の件頭新造となり。惣菜の芋を喰

て。屁の如き序文を作し。謹でもつて。一寸ゝゝお見なんしとおかいふ。

于時寛政戊午春視初衣裳日

於喝囉哩樓上

式亭三馬叙

傾城買二筋道

智者にも一失あれば愚者の一徳あり。加賀絹の弱きも薩摩布の強も。または御姆の棚尻も。脊負に利あれば捨がたし。通子の云。遊冶郎の乖功は。醜夫の温柔には猶及ざるがごとしとは。宜なり。人は只心のやさしきこそ尊けれと。不佞勝手を書事おかゝ。

午の初春

梅暮里谷峨述

目録

○夏の床
○冬の床

こしか夜に
程よき夢の
盛かな

谷峩

傾城買二筋道

谷峨作

○夏の床

世界ハ小見男客ハ二十五六のそッぺいのなき色男にて惚どころなきほど已惚の未至通九地廻り同前逢方ハ二十一二大抵ハ美しく甚浮氣まんざらでもなき四五合め

水調子で「合夜半の短かいよけれども思ふ殿御と添寢のふしに口でいめりやす」いへど眞實の中を隔るあつさの垣ね又た憎らしいあの蚊の聲と紙撚を取て蚊帳の蚊を燒つやかれつ浮氣同志とり所なき夏の床引仕廻ひ

須磨衣 いッそ主の聲は意氣だよ 五郎 聲ばかり磨ずと氣味やいも磨てくりやァ廣小路の十哲の中でいかんべんと云ふ物だせ 須磨 何のこつたへ 五郎 いゝやよ筆がしらだと云ふ事よ 須磨 チャむつかしい物だね

百さんとやらもいゝ聲だねあれも何ぞと云ふのかへ五郎なァに併しそふ聲で聞知れてゝ百も色男だぞ須磨そりやァぬし達のよふに入込でお出なんすものを誰でも知ぬものゝおッせんのさ大方ぬしもそこいら中が色事だらけも愛想の盡たもんだぞとらさずとも眞にお出なんすところを今日はあかしてお聞かせなんし五郎そんなに手前に氣を揉せる事ゝねへから咄してへがほんに此頃ゝちつと色事がしげゝだ其替りに内へ歸るとお袋のこゝとがある經節一本でもらう氣はねへか須磨チャ猫じやァあるめへし勿体ねへ間があたりいすにへそして本のかゝさんかへ五郎ほんのでねへと今頃はおさらば逃んふせいなりだ須磨よふ冗言をいひなんす口のはたをつねりいすにへァレきざな又人の顔を見て惡口を云をふと思て五郎惡口ゝいゝねへがマァ手前ゝいくつだ須磨當てみなんし五郎まづ手前いくつのとき賣られて判ゝ誰がした須磨でへぶむづかしいねハイ十三で賣れて親判さ

五郎十三で賣れて親判なればかふと指なら十三十四十五十六此四年ゝはなせねへから跡正味十年六兩づめ位な女だが子買だけ年いッぱい十五兩か須磨歳をあてなんすと思やァ五郎おつと氣の短へもんだ爰から割出さねへけりやァきつい所ゝあてられねへマァそッちを向て見せや須磨わッちやァいや五郎痩地にして髪薄く枕だこのいッた處まで能く踏んで二十三で御不足ならお手前におきゝなさる方がお徳用だ須磨むごい事ばつかりいゝなんす眞實ゝね深川にいゝした五郎なに深川に居たどふりで須磨人が惡といゝなんすのかへ五郎イヤ意氣だといふ事よ須磨あの嘘ばつかりほんに嫌と思ふ客人は腹の立程こゝろが知る又何とか思ふ客人ゝト此所まばしじれッてへ物だトかんざしにて五郎コチもちと手をわげてみや何かあるせ須磨わッちやァいや五郎いやじやァ不承知だト叱たりに手須磨まあ待なんし隨分見せへすが人の名を聞く時は我名を名乘とかいひすからマァぬし

の手から見せなんし五郎それを覺へるに本屋をいくら倒した須磨去りいせん五郎さあ見や〳〵おらが手にやァそんな野暮はなしだそこへいつちやァ高麗やでむかふに計りさせたサア是からハ手前の手を尋常に見せや須磨見せるのさサア見なんしハト自身手なまくり見せる所なり云ふ五郎まあてりやァ何だ貧乏寺の過去帳ハはだしだ是を見ている中にハまだ心の殘て居るのがあろふと思へバ須磨こふ見せもふす位じやァ假令どふいふ事があろふともぬしの心いさ次第でどふ共しいすのさ疑りなんすなら何でもしいせう又客人を突出ならぬしの不承知な客人は突出しいせう五郎馬鹿な科もねへ客人を突出す事もなし又指切髪切でわかつたと思ふハ昔の事よ須磨そしてどふすれば心がすみいすへ五郎そんなら一ばん早い事を言ふ須磨何だへ五郎金を貸てくりやァイ悔しめへ須磨そして外へ持てくのかへ五郎いゝや外

へハ持かねへがまあ手前どふいふ目遣へで呼かしらねへが己だとッて金が有り餘て遊びに來やァしねへとんだ内は火の車だけれど手前が水車のよふな口車に迷て空車が坂をおりるよふに了簡もなく來る氣だが爰だよソレ己計面白い目をしてお袋を日干にもされねへわな尤手前も勤ぐらいハたて引をする覺悟でもあろふが夫じやァまあ當分來られねへといふものだ又手前も實に呼氣があらば其凌を三三本貸てくりやそふすりやァおれも大に内も出よいといふものだ又手前の心いきもすッぱりわかりやすコレ何故だまつて居る不承知か何も其樣に茶碗を破ておッつけて見よふといふ顔をして居る事ハねへわな又おれに限らず手前の呼ふと思ふ客ハちッとハ地切を切ねへけりやァならねへ夫れとも頭の物は借物なら明日の晩迄に一兩二分ばかり借ておいてくりやこれ默て居るハ出來ねへか須磨そんならぬしは慾得づくだね五郎出來ざァいゝが手前も只呼ふとは餘程むしのいゝ

者だ少し位いどふか算段の有そふな物だ

まだ剛染も薄きに餘りの色男に逢方あじな氣になり互にしばし咄もたへ煙草に程なく夜もしらみ歸りし跡にて餞別の評もよからず引かたと心付きそこ没のあらが見へ大方是ハまき直しと見へたりまたつくろ夜のむしあつさに

五郎コオ何だそわ〳〵と何をして居たまた八重がりのやりくりか須磨きつい聞いた風だね五郎焼つぎの火加減の違だよふにサッぴんとする事はねへマア寐やな今夜はすッぱりおれが心いきを咄して安堵させてやろふ須磨安堵させるへあんどたァ燈をともす物かへ五郎コオをつにはぐらかすが己れがいつた事が出來ねへによつて言分なしの我慢だなハテ出來ざァきいたふうをせずと生得働のねへ生質で三文の工面もむづかしうござりやすとシラで云ふ方がいゝ大道で藥を賣るよふに呑込すがたをいつても性が入れ智恵といふ物だから人形芝

居の太刀打を見るよふに小サな袖から大な手が出たり何かするからねッから不都合だなんぼ水犬のとやといふ前髪を切ても綿天鵞絨の古巾着を見るよふに地が透て變だせ夫で耳のはた迄口がさけると智恵のねへ所を取得に葺屋町川岸へやるといゝ錢儲だ須磨わつちもいゝ錢儲を教へてお呉んなんしたから氣が丈夫になりいした未だ智恵の出來るにはぬしを黒焼にして夫を飲だらよかろふがねどふぞ智恵を欲うござんすそふすると可愛男にやァ意氣な形でもさせて呼て遣いす五郎何色男手前の色男はどんなだろふな慥に龍宮の使番といふもんだろふ其心は餅が好だ尻ごだまを抜れねェ樣にしや須磨ぬしい見かけに依ねへいッそ苦勞性だチいゝ加減に去なんし歳がよりいす

にへ花圓須磨衣さんぼち〳〵でいながらいゝ加減になんしよ敷より雛座

云ふ須磨チャいやよ夫でもチ始めは少しそうだつたがチもふ〳〵

大ちやき〳〵さ五郎何だ此椿木めら汝等にぼち〳〵のちやき〳〵の

と鼠が米櫃をかぢりゝ仕めいし何程玉屋のせりふを小耳にひッぱさんでもうぬ等にかきまわされて成ものかいゝかと思つてぼち〳〵のちやき〳〵のと玉黍か冬なら薩摩芋を賣と云ふてんな貧乏やたいにやァ似合ねへよしやなまあ全体でんぼうを扱ふよふにてしからめくされ銭じや間に合ぬ五郎様なぞと取組ふと思ば千手觀音へ鹽斷をしてぢぢりを三年も揉み三谷の毘沙門から百足を後見に頼んでもまだおかッたるい須磨夫だから取組ねへからいゝじやァねへかへ五郎つぐてきよふ口功者を云ふあまだ須磨まだ出世の身だよあまるお慮外だね五郎なに出世も氣が強い火口殼のてんびんに苧殼の杖で地獄へ燈心を賣に行ふといふ面でもか大方手前の寺證文にやァ過て手は切んしたゆへ手ゝ御座なく候とかいたろふ須磨ぬしは又代〳〵一向な仕打の者に紛れ御座なく候かへ五郎何だ此女は悪く晒落るせよしや假令物菜の荒布に百が梅漬を食ッて五丁町中へ黒飛の糞を垂ても張合

ふ事が成ものかへ旨蛇といわが事だ五郎様なぞの前では些少いしよげさふな物をおさき眞闇で晒落るがおれを知ねへけりやァ耻のよふに思ふ世の中だ手前らがよふな野暮と怪物は箱根の御關所で通さぬ筈だがサ須磨チヤ怖いのふ花園さんお聞なんしへ野暮から妖怪が出いすとサいッそ氣味が悪うござんすよ五郎蒟蒻の幽靈が凝海藻のお傳馬に乗りゝしめいしそふ慄々する事はねへ妖怪が怖いのかそりやァ氣遣ひしやんな手前の顔が怪物とあいかうと云ふ物だから向ふで指を咥て逃るわな本の人間のふりをして仇に思ゝぬがいゝおれなればこそ辛抱して五六度も來てやつたもふ色男の呼始の呼おさめと思や跡で泣てもわめいても取あげゝねへせ須磨ほんにぬしの様な客人が來さつしやらねへと力が落て明日から役所へも出られずほんに悲しい事だぞ泣てへけれど何故か涙が出へせん泣れるか小便にでもいつて泣て見よふ

ト平氣に出行バ殘念にも又爲方なく意趣をせんとハ思へども毎夜素見の邪魔なれバ今ハ空くさろ〳〵と寢入しが不圖目覺め白壁土藏へ月のあたるな夜の明だと思ひさも嚴氣に若い者を起し月な明させ表へ出ると犬わん〳〵

○冬の床

世界ハ大見勢客は三十一二甚だ醜男容中に緣のある頃なれども万事意氣にして如才なき通人なり逢方ハ中三歳ハ十七八容貌風俗小町もそつち退にて一体發明にて强く情深きなれども未だし若の處女氣にて此客を嫌ふ事いはんかなし折節隣座敷にて藤吉がメリヤス

「合雪の夜中の冷くて初手は隔てゝいつとなく枕と枕顏と顏意地の惡さの透間からアレ邪魔をする夜寒の風と襟と襟とを掛合あふて勤も戀も打越して眞實籠りし冬の床チヤンヤ〳〵 一重 氣散じな物だのコウ呉

羽や又誰か筆を持ていつたぞ大方又外山さんだろふ早く取て來や 呉羽 あのネ外山さんがおッせいす御免なんしつい急に入いしたに因てお借もふしいしたお有難ふおすとさ 一重 きつい不酒落よふだね行燈掻立るなせ此灯いてんなだのふ 硯引寄せる 客 文里 どふぞしたか 一重 どふもしいせんのさ 文里 それでもをかしな顏付だせ 一重 生れつきでおすものを 文里 其樣にいはづともの事だらふヤア愛想づかしを止て一ッ呑いどふだ氣が晴よふせ 一重 私ハ何故か人にものを云れると腹が立て成いせん後生だから些と物を云ハずに居ておくんなんし 文里 こりやァきついぞ成程十七八の時分ハ可笑くもねへ事に笑つたり何でもねへ事に腹を立ものよヤア〳〵どふ共氣儘がいゝ併し風をひかふせ羽織でも着て居れバいゝ

いたいけに云ハるゝ程猶腹立ごもあたろふしまも有ざれバ我と我手に書く文の書損ハ筆の科さがなき紙を引裂て硯にあたり立出る折柄是もよひ

出し中三一重が姉女郎九重ハ障子を開て見ておやといつた計にて跡を振かへり廊下を通る胡蝶を呼び

九重こんな〳〵吉野さんに文里さんがお出なんしたからお知せもふしいすといつてくりや文里おいらんサア〳〵待兼て居たきつい忙しい事だの九重なアにマア何故此頃はお出なんせんへ盡も吉野さんや誰かと噂をしていゝしたお前さんこそ忙いこつたね文里ソウサおれもいつそ懐しかつたけれども浮世の用にせめられて粉に成そうだわな

折しも胡蝶の知せに程なく是も安心き中三

吉野チヤ文里さんよふお出なんした何故久しくお出なんせんとみんなと待兼て噂ばかりして居ねしたほんにわつちとした事が云ふ事ばかりいつて九重さんよく知せておくんなんしたマア一重さんを聞ておくんなんし幾度も逢ながら知ねへ顔をしておいりいすわな九重わつちにさへ無言さ文里ほんに嘘にも其様にいつて呉るから嬉しいほんに友達と寄とお前方の噂計りして居よ吉野悪かへ後生ざんす文里お前方を悪く云ふと罰があたるわナ吉野堪忍なんし又文里さんの世辭が始つたサア久ぶりで上いせう文里先おせへにせう吉野そんなら九重さんおあいをお頼もふしいす九重一ッ食いせうねこんな櫻野茫然なもんだの此處さかづき出す禿半分ついで顔を見て居るいゝから一ッつぎやな文里お前方ぞふいふ縁かこふ心安くみへも捨て咄て呉るから何ぞお前方の好そふな物をと考て云付て來たがアノ忠七いもふ持て來そうな物だ九重そりやア樂みでざんすね間もなく茶屋男忠七いろ〳〵お待兼でござりませう生憎客人が落合まして勝手が取込大きに氣を揉ました文里よし〳〵マア一ッ呑ねへか忠七先あとの物を持て參つて綏ッと頂戴ませう出行〳〵九重吉野さん今のおあいを上げいせう吉野文里さん上もふしいすにへほうけ文里肴が來たから先おゝせへだ吉野

私ちやァ嫌いゝ虫だつけね　文里　飲る位ならあこぎはしねへが今夜ハ酒の匂を嗅もいやだからさ　吉野　そんならマァもふ一ッ受いせうが何ざんすね　文里　ふさぐからさサァ〳〵おれに構はずと食てくんな　吉野　そりや悪うざんすねわの一重さんハ如何しなんしたね　文里　今來よふわナ　九重　夫でも肝心のトたそふ　文里　そふ云て逃よふと思つて　九重　きつい悪氣だね今夜ハ吉野さんも私も丁度いゝから追出される迄居いす氣さ　文里　サァそりや嬉いが一ッ饒に二ッ顔じやァねへかへ　九重　嘘ハ嫌さ　文里　そんなら食て呉ねへけりやァ氣がすまねへ　九重　文里さんも少し　文里　わつちに構はず〳〵　九重　なせだのふ

扨此二階中甚よく思はれて皆心安けれバ來るあれバ歸るあり障子越に言葉をかけるあれバさつちりと咄すあり實に見へもなく飾もなく傾城も樂屋ハ只の女にて爰に種々あれども事繁く又明白にハ現し難く御存のお方ハ大概に御察しと略す跡に四五人殘て

初瀬路　文里さんハ何故食なんせんェ　文里　何にもいやさ　あすかの　はんにいつもの樣に元氣もござんせんドウカ顔の色も悪い樣でござんす　吉野　無理に一ッ呑なんしな　文里　ぞふぞあやまつた　九重　まあアノ一重さんハ何をして居るこッたね　文里　ハテ待うちが花待るゝが蕾開かぬ中の樂さ　九重　夫でもあんまりトたつめ　文里　おめへ方が欠ると花が散わなマァ下に居なあの子の來ねへ中おめへ方に咄て置てへ事がある必笑て呉ちやァ怨だせ　九重　何の事だか氣に懸いすわな　初瀬路　何だんす早くお聞せなんし　文里　イヽヤョおめへ方も知てる通り一重さんもよく〳〵嫌なれバてそこふ久しく來る中にもついぞ笑つた顔を見せた事もねへに愍然にコウ便〳〵と來るもあんまり智惠がねへと思ふからモウ來めへ〳〵と幾度か思ふけれども此樣にお前方が心安くして呉れるが嬉しさ又ハあの子も未だ歳がいかねへから氣隨だろふと思へば悪くされる事ハ何とも思ハずおめへ方の前だが人の上に立者ハ

人に指をさゝれねへ様にしねへきやァ成ぬが一重さんの様に慾がなくつてゝ次第に身詰りに成るだろふと行末が思ひ過しがしられて案じられるから今夜ゝ嘶さふか朝ゝ咄さふかと思ふが此様な事をいつたら又氣に障ふと思つて云兼て居たよァノ子ゝあの様に思ふがおらァ残し跡なマァ夫ゝともあれ斯ふ久しく來ると云ふも縁だろふと思つて異見をいつたらモウ來めへと思ふがどふで己がいッちやァあの子の爲めにも成めへから九重さんゝ格別の事だがおめへ方も共〳〵よく苦界の入譯をいつて氣の直る様に異見をして遣てくんなせへ頼むせ是でもふ思ひ殘す事ゝねへが今夜が此二階の暇乞だと思へば馬鹿なあじな氣に成た一座ほろりと涙なこぼすてふ久しく心安くしたものだから來ねへといつても若つきやいで來た位なら格子迄來るから今迄の様に心安く逢てくんなよ

ト云へど返答あらざれ共なかに九重座し聞て切なる心を感じいり思ひあまつて泣ながら一重を伴ひ我部屋にて

九重 おめへゝあきれけへるよ 一重 チャ何でおすへ 九重 なせ文里さんゝ嫌だか又もらい泣して云ふ 御室路 今立て聞て居いしたが文里さんの心底が愍然で泣てばかり居いした 九重 おむろじさんいつて遣さふと思ひゝすが胸が一杯に成て申されいせん言つて聞せておくんなんし

おむろ りつ泣ながら常住申しいすが能く物が分りながらお聞なんせん尤久くお出もなんすけれども二階中で一座をせぬ者迄が心安く誰でも悪く思ふ者ゝ一人もおッせん文里さんが些と足が遠いとお前さんゝ何共思ひなんせんが皆が待遠がつて噂ばかり云ていゝす夫よりマァ茶屋の前もおッす尤文里さんの事だから人に知せもなんすまいが夫だけ氣の毒で有さふな物でおす 九重 まァ文里さんを呼氣ゝでざんせんかへ夫じやァすみいすめへによ爾してマァ不人情と云ふ物でだんす紙一重捻て居る尤胸にも覺が有いせうがあの様に深切にしなんす

程意地にかゝつて惡くしなんすがついぞ腹を立なんした事もなく今も今迚暇乞をしなんして己が來ぬ跡でもお前があんまり氣隨だから行末を案じると皆にも頼みなんした惡くされる事ゝ何共思いずこんな深切な客人が有ふと思ひなんすか女郎名利が盡いすにへほんに些と苦界と義理をお知なんし斯ふ申いすも思ひゝすからでだんす

一重

其樣におめへさん方が私を思つていッておくんなんすと思へばいつそ嬉しうおすほんに文里さんい久しくお出なんす内もいやらしい事もなく勤にくゝもおッせんし物前の苦勞をせぬも何やかやぬしの世話ゆへだと思ひすがなせか其樣に深切にされる程猶いやでなりいせんからつい惡くしいすけれどもいつでも機嫌よくお歸なんすゆへ跡では氣の毒に成いして今度來なんした時ゝよくしいせうと思つても顏を見いすと腹が立て成いせん大方讎どふしとやらでおッせう堪忍しておくんなんし

九重

あきれけへるよそんならどふ共なんし

ふ

ト云ひ切ば立も立れずうち〳〵と座敷へ行との言葉をしほに氣の毒さふに立出て何心なく覗へば文里をはじめ一座の傍輩座敷ハ涙の露時雨一言いふてハ咽かへり顏見合て泣沈み名殘を惜むその風情ふびし猶豫其中に然々と思へばほんに今更に假初ならぬ三年の恩又もかけ替がへある樣になぜあの樣にした事かさまさか名殘の惜まれて頻に哀と胸迫りまだ其上に此身の上是迄あだの悲しみなく行末迄を案じると殘る方なき情ぞと心で模出す我身の過りわかれど徐々に氣も亂れ打て變りし一重が心底わつと計に泣伏せば只さへ哀れな此座の摸樣又も一座ハもらい泣前後もわかず伏沈む文里ハよふ〳〵氣を取直し

文里

さふみんなが名殘を惜で呉れるゝほんに嬉しい忝ねへが夫じやア猶さら歸られねェあつさりと笑顏を見せてくんなふきながらいふ涙ほんにどふで限のねへことだ居れば居る程思ひの種ださあ〳〵歸ろ

ト側に有合ふ茶碗にて手酌のむり酒二ッ三ッみんなへもと跡ハ涙の暇乞
行んとするを一重ハ在にあられぬ思ひ猥に取付泣伏バ文里ハ振切下につ
くばい

文里 みやげ心の愛想ハ嬉いがこれ能く聞な外の者にハそふでも有め
へが假令おれが樣に眞にいやと思ふ客人が來てもおめへの樣にして
ハ身の爲にならぬから些と慾をしんなせへ若さハ若し無理もねへが
はて好た男ハ稀にして嫌な男の多けれバこそ苦界といふものそこを
隨分辛抱して陰ながらいゝ耳をきゝてへ又こんなのろい句をいッて
氣に當らバ堪忍しな

ト立上れバ一重ハ何とせん方もごふぞしておくんなんしと半分跡ハ咽か
へり涙を押へて初瀬路ハ

初瀬路 これ文里さん今夜ばかりハどふぞ居てあの子の胸も聞ておく
んなんし 文里 ハテ留て呉てハ怨みだ腹をいふのも心安いと思ふから

初瀬路 サア隨分無理とハ思ひゝせんが一重さんもあの樣にいひすか
ら 文里 ありやア三年もこふ來たものだからまさかに愛想ぶりだわな
吉野 何でも私共が一生の賴でざんす 文里 おめへ方が其樣にいつて呉
るを野暮に歸られもしめいか 吉野 何にも申いせん嬉うざんす あすかの
九重さんは泣てお出なんすから此由を知せて喜ばせもふしいせう
トよふ〳〵一座し氣を取直し座敷をさめて床へ入暇乞やら祝いふやら我
部屋〳〵へ立歸る一重ハ涙よふ〳〵とお忝ふござんすと云た儘にも捨がた
く世話に成し禮いハんと泣〳〵座敷を立出る文里ハ上着ぬぎ捨て帶く
る〳〵と引しめて煙草煙らし居る處へ問もなくばた〳〵一重が足音こな
たハ後へ向かへて寢たる樣子にもてなせバ一重ハ眼ぶち泣はらし涙を拭
しみす紙を手にもじ〳〵と捻ても何かしきゐの高けれバ氣の毒さふに床
に入少しハ心落付ごまだ氣に掛るハ文里が胸何から云ふてあやまらんと
覗てみたり考へたり惚た初會の如くにて云んとすれど云かれて思ひ〳〵

て時移り拍子木の數かぞふれバ最早七ツのあけ近けれバ思ひ切てモシヘ〳〵と云へど一向答なく今宵いハれバ別れての跡で云ふてハかへらぬ事と思ひ廻せバ氣もせかれ何とせんとハ思ひしが思ひ餘りて堪忍してとッと叫べバ文里ハ目覺めし樣子にて

文里 何だ惚りしたつ振向煙草をぞふした又癪が起たのか 一重 段々のお腹立無理とハさら〳〵思ひヽせんぞふぞ堪忍してむけつば 文里 是ハ改つた腹を立位なら今迄人の口齒にかヽッて來ハしねへが其樣に嫌がるものを便々と來たハ己が罪だッけよ 一重 其樣におッせいす程なせあの樣な氣であつたと思へばいつそ死たふをッす今迄が今迄だからぞふで承知ハしなんすめへ

ト袖て用意の髮剃にて手早く袂を口に入枕へあて〻小指を押切紙に包て投出し

一重 是迄の事ハ堪忍してうたぐり晴しておくんなんし

ト溜くゝる血しほを紙にて防ぎ未練を見せじと齒をくいしめ耐へて見てもぞへしハ眞實見へていじらしき文里ハ取て投出し面をかへて

文里 いらねへッへこんな物を餌にしてかヽれる樣な科ハしねへッこれ今迄ハ年端がゆかぬ故あぞけねへ慾のねへ子だと思ふから惡くされるも厭ハず來たが打て變つてコウづぶとい仕打をされてハモウ癪に障るこれ先惣體苦界と云ふ物ハ錦の夜着にからまるも菰一枚の辻君でも面々の好で勤するのハ一人もねへ親兄弟の爲に身を沈め夫を思へバふびんさに氣隨氣儘も里の習慣と通して遣ぞよ辛からバ只一筋につらからで心に思ハぬ虛涙今に成て何の證言云ひたひ事ハ種々あれど我とわがてに耻を云ふのが愧しさに耐へて居るぞ何所へぞ賣て金にしろ

ト云ひ放せバ一重ハ始終しやくりあげ〳〵

一重 成程腹も立いせうが夫も私が心からだと身を恨で居いすがせめ

て一言堪忍したと言なんすを聞た上でい命いさら〳〵惜ふおッせん
トいゝたい事もせきくる涙に暮られ心ハ何所へ飛ゆきしか最早別れと思
ひ詰め一重ごふでもねしハと云へど見向ず小聲にて
文里 江戸「書て送るい文の嘘誠少き命毛も鹿毛もなく音や暮らん
ぶし」一重ハ今ハ是迄と以前の剃刀取出し既に危く見へたるに文里ハ周章て止
れども放してころして〳〵と暫しあらそふ其中に剃刀取上げ口へ手をあ
て文里ヤレはやまるな何故死と云ふ聲聞て怨しげに顔打まもり一重何故
とハ聞へいせんごふで疑晴れハせず未來で言譯しいすから構わず放して
ころしてと髪も亂れ氣も亂し文里ハ又も油斷なく
文里 これさ〳〵うたぐり晴たこれさモウいゝいなゝまあ〳〵顔で
も拭やよさ一重 そんなら堪忍しなんすかへ文里 ムウ堪忍するよさ
爰にホット溜息あると中庭の連理木にて喜び鳥
カア〳〵〳〵

自跋

二筋道とい。世に行るゝの。大道の善にあらで。右も左も銀世界。うかれ烏のまよひ來る。はかなき雪の粧ひに。はたして水堀へはまりやすきい。是人心ぞかし。されゞ吉原へい入らぬこそ實の通意と高尾が金言。雨降ずして地固ふするい。此書に足る事を知らゞ。何ぞ心の雪解に泥す愁ひなからん

二筋道後編廓の癖

序

ながき浮世にみじかい命夢で暮すの虚工こと怜悧の嘲咲を慚愧さらむや故に其悪夢を綴り捨てんとすれば僥倖成るかな書肆猟亭來て是をくらわんと乞ふゆへうむなしにあたふ于時夢覺生れかわつた未のはつ春

葬亭

梅暮里谷峨自序

目錄

○第一　信宿の生疑
○第二　將暮の愚鹵
○第三　功計の赤心
○第四　任俠の寸丹
○第五　離憂の夢飛

二筋道後篇廓の癖

谷峨作

○第壹　信宿の生疑（客文里　か耶一重）

何か互に物あんじ姿ハ身の上のことにや片手ハ抱れ合て水調子小聲にてめうとびき

メリヤス出し「いで人い春のみぞよき月草のうつし心の色毎におけるも露のいたづらや合「一重ハ文里をしり　文里　アイタ〳〵　歌にう「男の餘情束の間もうち捨られぬわきも子の狹きおもひい一筋に流れの身にも裏ぞなき合方詞　文里　アヽぞふした因果か片時も逢ねばならぬ樣に思て來て見れバおもしろい咄い一ッもせず只身のゆく末を考へ互に愚痴をならべるのみ今に逢れぬ身にならば北時いぞふせうといろ〳〵　惡ひ思案をする事も知らずおれが樣な不了簡な者でも親と思ふかして內へ歸る

と子供等が爺〳〵とたまに逢ふゆへ懐しがりすれつもつれつ喜ぶ顔を見る度々に胸ハいつぱい夫を嗅ハ云ぐさの色々の異見も腹を立バ立者の無理とハさら〳〵思ハぬ今でハ己が心でおれが自由にならねへ夫に何ぞや面白そふに抱れ合ふての三味線どころでも有めへかへ

一重 泣出し よしなき私に羈れなんして何不足もなきおめへさんを其様な身にしいしたもみんなわたし獨の罪お時さんもさぞ憎う思ひなんせうが堪忍なんしはんに是が悪縁とやらト又じつ見て思ふ人もおすせうが遠ざかる事は扨おき惚るに關もないかして昨日に今日と積る思の堅ふなり切ても切ぬ二人が中此上どふいふ世の義理で別れよふと云ひなんす其時ハ死ふとハ兼ての覚悟でおすけれどそふしたらお前さんの顔が見られまいかと夫が悲しうおす

文里 ハテ泣事がある物か可笑らしい手前一人で惚て居よふな事をいふが今云ふ通り翌か〳〵と身を責るも子にひかされるばつかりでこふして何の別れる樣になれバ手前一人ハ殺しハせぬ三途の川も手を引合てと淨瑠璃でいふ通りさ

一重 本でおすかへ必ず忘ておくんなんすなへ

文里 ア、馬鹿〳〵しい今死ぬか何ぞの樣に歌にうる「愚痴もまことの誠からたまに便のない時さへも夕氣の占にやるせなき又無理酒を過しても何のたわいハない物をはんに氣がねや身の爲も諦めやすい中の事これ寐なんすか憎らしいアレもふ本に東雲の朗々と明ゆくハ猶肌寒き後朝の別るれバこそ逢ふも樂しきチヤン引仕廻

又も互にふさぎし折から一重番頭新造花の香客をかへした足にて一重が座敷へ入

花香 市さんハ歸ましたよ宜しくとサ

一重 もふ歸りなんしたかへ堪忍なんし手前に取紛れて市さんにッイお目に掛りイせなんだ

花香 ナニ市さんハ文里さんのお出なんしたを承知でおすから何とも思ひイせんがお前さん方の昔に變る姿を見いして儘ならぬ物だと男泣に泣い

した

又云ひ出してハ泪の種花の香ハ氣を取直し

花香 主ハ寐て居なんすかへ 一重ナニわんなに塞でばッかりお出なんす 花香 そふでもおつせうかへもしへ 文里さん酒でも呑で氣をお晴しなんしなハテ浮世の風ハ色々吹いすワ 文里 花の香さん堪忍しなお前に顔をあわせるも面目ねへ一重が事ハ云ふ迄もなくおれが事まで何かにつけ影になり日向になり世話になるのを心なくこふ果しなく苦勞を掛るハあんまりな物とも思ハずいつも變らぬおめへの仕方おらア拜んでばかり居るよ 一重 ほんでおす常住氣の毒がつて云ひなんすが私とても其ほどふり介にこそなるハ眞實なりそふいふ事もなく一方ならぬ世話になりいすおめへさんを妹と呼も廓のならいかと勿体なふ思つて居いす 花香 お前さん方ハ他人がましい何の事でおすへお前さんにつけられる時分も内所でも色々云付なんした事もありいした

がどふいふ事やらお前さんなり文里さんなり初からよそならず何事に寄らず身に引受てしいす氣だがね心程にハ届いせんがマア聞ておくんなんし市さんの申いすにハ如何樣な大盡も廓の金にハ詰るがならいおれも及バずながら手前のつながる一重さんの客ならまんざら他人とも思はぬから何所の足にも成めへがおれが貸たと云わずに手前の工面した樣に貸てあげもふせと私に渡ていきいした少でもこりやア市さんの志だからマアお前さんにお渡もふしいす（十兩紙包の金出す）一重 何も申いせん嬉しうおす此樣にかさねがさね世話になりいすも前世とやらからの約束でもおすかマアいつの世に恩と送られる事かと思へバ夫が苦勞になりいす 花香 ハテ馬鹿らしい恩にかける位なら色々に氣ハ揉いせんわな 文里 市さんの男氣おめへの實氣死でも忘ハ去ねへ嬉しいせ 花香 また段々身の上を思ひ出してふさぎなんしていわるふおすサア〳〵一つ呑イせう

ト側に有合ふ茶碗引よせ手酌に冷切つぎ呑文里さん上いせうとさす

花香　また行つてきイせうね　文里　まだよかろふ　花香　もふみせ前だから花鶴さんや誰かの身拵をしてやらねエけりやア成イせんまづ後程へト出ゆく跡ハ大ふさぎ文里ハ受し酒を呑んとして咽る

文里　オホン〳〵　一重　誰も惜みハしイせんト脊中をする　文里　もふ呑めぬかち呑でくりや　一重　なせトいのむ　文里　あの子の眞實を考へると胸が一ッぱいになつて酒も通ちぬ此の間も〳〵とて色々思ふ中に世話をやく女郎衆と云ものハ内所でも夫〳〵に心を配つてつけるとハ云ひながら兎角小やかましく下への勤ぶりをして遣手や何かと並んで向面になる物ヨさふかといつてて〳〵ハ相應に色事もかせぐが思ひやりのねへのがマア常だがアノ子の樣な番頭新造といふものが有るものか今迄もさしたる事も有るめへにて〳〵の客より貰ふ金も身に付よふとハ仕わせんで二人が苦勞をするを氣にして此樣に工面して呉

るといふハ山から里の譬の如く思へば〳〵おらたちほど罪の深ひものハ有めへ　一重　どふいふ事か花の香さんの事ハ云ひ盡されイせんなれぜも二階中でも向ふに成て邪魔をする物ハなく色々内證のやりくりまで身に掛て世話をしてくんなんすがほんに人の世話をすべき身とハ思ひイしたけれども今じやァ愧かしいとも何共思ひイせんが中の町へも出られぬ身ゆへ引込で居イすれバ遣手衆や若い衆迄がヤレ雷さんの病だの何のと色々あてこすりをいハす　文里　そりやァ何の事だ　一重　私にも知れイしなんだがね私の着物がいつでもおンなじ形りでいハすを云ふ事でおすとさ　文里　何だハハァ雷の病なら北鳴だと云ふ事であろふ　一重　ほんにそふでおすしたさふ侮らるハと思へバいッそ口おしうおすが又いつか顔を見かへす事もありイせうと夫を樂で居イすのさ　文里　手前もいハ事を云ふもんだ詰りにつまつた二人が身の上段々積る掛に茶屋も送られねへと云ふハ幾度か是迄ハやりくり

をしてわかる樣になるといのつまりハ可愛相に年季迄入させ苦勞を
增せ當分は肩身も廣かつたが何だつてこふ一日でも逢ねばならぬ樣
に思ふものなしても三百さがりのふべるを茶屋の不承知も無理でも
ねへが今迄が相應に爲にもなり折々は拂ひもするしまんざら末ハ滯
ると思ひながらも二才野郎を見る樣にお爲ごかしの意見も云われず
心ずけてハ三度に二度ハ茶屋で逢して呉たが其樣に中の町へも出ら
れぬ身にしたゆへ夫も出來ずマァのけうんと止らるゝ迄と斯ふ來は
來るものゝもふ此頃ハ大分むづかしく云ふそふだ併し爰の旦那が解
つた者だから今まで堰もせぬけれど外々の内でみやゞゝしてこふな
がもちハさせねへ夫だけ了簡せねばならぬも何もかも承知で居なが
らどふも逢ずにハ居られぬも是も因果ださいでしふまた藝者牽頭持抔
に道で逢つてもこんな形に成たを氣の毒に思ふかして顏を見合せる
と只につこりとにが笑ひをして早足に行違ふ昔の事を思ふとアノ女

郎ハ面白いの美しいのと云ふ位な浮氣な事でハ此廓へハ愧しくッて
かたきし一足もはいられねへ一重何かに氣のつき過る程なおめへさ
んゆへ人二倍せつなゝおッせう能察して居いす其樣に苦になんして
煩でおくんなんすな尤内所でも大きにやかましく云すが此間お咄し
申いした樣さんの方も大方ハ出來いせう若出來るとちつとハよふお
すマァ此金で二階の借を片付いせうおめへさんもちつと持てお出な
んしな翌の晩からハ肩身を廣くしいす其かわりに翌ハお出なんすな
へ其樣に塞がずともこつちをお向なんしなコレ癡なんす事ハ成いせ
ん文里止せへ一重又お時さんの事を思ひ出しなんしたのかへ文里何
の手前の嫌がる時分に切て仕まへばよかつたに一重其樣に氣まづい
事を云ひなんしてもいつてかへらぬ事でおす併し鉄さんやお初さん
と二人ならず二人まで可愛い子をなしなんしたお時さんとの中その
寶氣の意見に引されなんして其樣な事を云ひなんすのかへ夫程切た

く思ひなんすならぜふともなんし切れふバあとで死なぞなり 文里 大きなべらぼうでいでざらぬかそふチオ夫と切られる心ならこんな身にもさせも成もしねへ夫共切たくば勝手に切れろ 一重 私が切るといへば切なんすのかへ 文里 ぜふする物か知た事よ 一重 そふいなりィせん 文里 成ぬもすさましい今切れて呉ろと云ふたじやァねへか 文里 其様に言懸で も何でもなんしぜふでお時さんの様でいおすせんのさ其様な事を思ふといッそ死たいと側に有る次第投ほふる物あた 文里 此氣違いめ何をする 一重 何でもよふおすおめへさんの世話にい成いせん 文里 此あまはふといあまだなしたぶさをさらわせなら引へた何世話に成ぬとおれがこんな身に成たゆへ見くびつてうなァ世話にするを恩にかけるな夫といふが愛想が盡たからだィ、リ權とやらとんとやらも色男ださふだから牛に馬を乘かへろぜふりでお爲ごかしに翌の晩に限て來るなもいゝ權もまんさらで呼客心やァねへと度々耳に障た事もあつたがよもやと思つて

居たが是で思ひ當たさふいふ心とい知ずナ可愛子迄暑いめや寒いめをさせるぞよ此畜生め

ト愚痴の恨の打擲に悔し泪のはら〳〵と打れながらも聲立てハ文里が爲に恐からんさ袂を口へ押當て噛しめ〳〵泣沈む折しも隣座敷中三吉野ハ此樣子聞付そふ〳〵驅付さりさへ分る

文里 マァうつちやつて置てくんな 吉野 まあ〳〵おはなしなんしやァぜふ云ふ譯でざんす私に任せなんしな 文里 此樣な身になつたらばあいつにまでみくびられて色々なきつい事を云れると思へば口おしい夫といふが色男が出來たからだこんな物を知ぬやつい何してもいゝ 吉野 如才のねへおめへさんが私共の眼から見ても其樣に愚痴になんしたいお前さん獨では成られいすまいすれバ假染の中じやァ有いせん假令權さんとやらがいゝ男にもしなんしぜふまあ見かへられイす物でざんす 文里 夫でも此間中から面白くもねへヤレお時さんの

何のと己が心にもねへ事をふしを付て腹を立せたまぎれに切よふと思つて色々なたわことを云ふワナ【吉野】モシ〜何の馬鹿らしいそりやァお前さんのまはり氣でざんす【文里】イヽどふもわやしい【一重】何がわやしうおすへ【文里】あやしいからあやしいワ【一重】いつそくやしい私が心を知ぬか何ぞの樣にわんなな無理ばかりいゝす吉野さんも知てお出なんす通り相應に客人もおッしたがぬしと度〳〵落合ふ客人ハッイろく〳〵行きイせんから腹を立せ又ハぬしの事であつかましいむしんも言すゆへ愛想をつかして段々切れ今でハ一人も馴染で來て呉てハおすせん權さんとても何しに呼氣ハおすせんが少ハぬしの助にも成ふかと取とめて置イすがうたぐらるゝ上からハ突出てしめへス【吉野】一重さんマァよふざんす遣手衆が聞耳をして居イす何もかもわきめェなんしても一つ疑はしく思ひなんすと生憎云ふ程する程の事が疑はしく思ひイすワおめへさん計でハざんせん深いも淺いも有ならひ

でざんす夫も其樣に今でハ苦勞なんす故ひがみも出へすのさ更〳〵無理とハ思ひイせんが深い譯でも有よふに何でもねへ事に腹を立やい中も直らず別れなんしたら互に心が濟イすめへにェ【一重】そりやァそふでおすけれど今日計でハおすせん何ぞちつとお時さんの事を云ふとわの樣に腹を立て打擲をなんすどふで邪魔に成身なら死ぬ方がましでおす【文里】あれ見なあんな横車をいふ【吉野】ハテよふざんすワナそんな浮氣らしい口舌を止て權さんの方のむしんを早く調へて互に氣を休めなんし【一重】私ハそふ思ひゝすがもふ何かに付て私が思ふ樣にハ思ひなんせん物を吉野ハテ鳴ぬ螢もなく虫も思ひハ一ッでざんすワナ【文里】あいつが何のかのと言て腹を立せるからッイいま〳〵しく成からいつもお前方の世話に成も氣の毒だ【吉野】アノヤ馬鹿らしい何ざんすなァレもふ引だそふだから仲人は宵とおいとま申イす【一重】吉野

さん最ふいつもながらへ

吉野ハ枕元の屏風を建廻し出行く跡にても元が根も葉もなきが只互のひがみより出たる口舌なれば中直の酒といふも入す手がさわり足がさわりするく〳〵べったりといっか元の比翼連理となれり併し作者も此品でなければ色男方ハ悪しからん扨屏風の中は言ぬことソレホチ〳〵咄がはじまると

引ケの柏子木カチ〳〵

○第二　將暮の愚圖

禿の知せに一重ハ早速店の格子へ出最早夜見世前なれバ心せくにや座敷の格子の方へ廻し

一重　マァよく此雨の降にお出なんしたね　文里　今夜計ハ内に居よふといろく思ひ直したがどふも氣が濟ぬから一寸逢に來たそしてあの權の色男野郎は來たか　一重　アイサ晝から來いした色男ぶりをして胸

の悪い事ばかりいィすを是もおめへさんの爲だと胸を擦り〳〵合鏡もよッぽど辛い役さ察しておくんなんし　文里　そんな事を云ふがたとへまんざらでも客が來た晩の時でもゆふしいやましき客人にていとゞつらましくと文にやァ書たろふ夫だから胸の悪いもあてにハ成ぬ　一重　アノ馬鹿らしい己惚を出しきつていゝす物を誰でも胸が悪うおすハ　文里　そりやァ夫にして遣ふが金の事を首尾よく遣ふぞよ　一重　おめいさんが居なんせんと外に心ハひかれず私が一生の嘘をつきいす氣さ　文里　嘘から出る誠ハならぬぞよ　一重　文里といふ胸に大きな錠がおろして有りイすハ　文里　あい鍵か又おろしたつらでそら錠ハあやまるせ　一重　後生でおすそりやァそふと鐵さんの虫氣ハよふおすかへいつそ苦勞に成いす鐵さんに上もふしいせうと思つて菓子をとつて置イした上もふしておくんなんし　文里　まだ虫氣がよくねへから止しにしよふよ　一重　お初さんに上なんしな　文里　あいつハまだ甘い物ハ喰

せねへ 一重 お時さんの腹から出なんした鐵さんだがお前さんの子だと思ふせいかいつそ可愛ふおす 文里 手前がさふ可愛がるせいか伯母さんの所へ行くならおれも一所に連ていけと兎角跡を追て己を困らせる 一重 ほんでおすかへ可愛のふそんなら今夜計りでも早く歸てあした連もふしてお出なんし 文里 手前勝手な物だのそふかへしたがる物を歸ろふ〳〵 一重 何の事でおす 押ゆる 文里 よしやナ 一重 そんな氣に掛ることを言なんしておかへし申いせん 文里 こふいひねつて見るものゝ歸ふよ併しあんまり口などを吸せる事は成ぬせ 一重 あれ又いつざう仕いしたへ 文里 ついていめいし知る物か 一重 そんな手が有バおめへさんにも此苦勞ゝさせ申いせんけれどモウお歸りなんすかへ 文里 二足三足行し肝心の事を忘れた彫物を火葬にしてゝ浮まれねへせ 一重 よふおすよ何處へも廻らずに早くお歸なんしよ 文里 知た事さ

トまた逢れる身なれ共名殘を惜み跡を見送り又振返りよふ〳〵と別れしが又さつて返し

文里 これ〳〵 一重 一重 文里さんかへ 文里 どふも歸られねへ 一重 そんならお上りなんし

トいふもはや夜見世知せる、鈴の音がら〳〵〳〵

○第三　功計の赤心　女客 耶一 重 檜

何か咀て文里を隣座敷へ入一重ハ塞し樣子にて床に入

檜 どふぞしたかごふぎに塞ぐのマア何をして居た 一重 わざと手かゝさんが來いして又 檜 チット跡を云ふめェせんどのむしんの事かだ一重ハうつむきいゝわさ弟がどふらくゆへ何かむづかしい尻の有金をつかッたゞよつて是非なさねバ成ぬとお袋が種々氣を揉どやら夫に付てゝ年季も入ねがならぬと咄の譯も立て居る事だから隨分貸ふと思つて五十兩ゝ持て來た 一重 私が爲にゝ嗅さんゝ繼母なり弟ゝ連

子ゆへどふも物が仕にくい義理でおめへさんへ此様な事を申いすもよく〳〵と察しておくんなんし尤知なんす通り前度の様に客人でも有ばおめへさんにい申いせん【幡】こふいッちやァ可笑らしいが今迄金で女郎をかつた事のねへが手前が日頃いつこくな根性が外の者と違つて面白いから咄にのる其替り譯のねへ金い三文でも遣れねへ又おれが云ふ事を聞であろふな【一重】聞いすからお咄なんし

隣座敷にハ文里エヘント咳なして一重にあたる

【幡】ヤァ手前了簡してみやこふ馬鹿のろく來るが是といッて何にも手前の分つた事いねへせ【一重】ハテ彼是と浮氣らしい事をするよりも互に心と心の誓に上を越す事いおつせんワナ【幡】されバさ其頼にする心と云へバ嘘をつくが商買だ物を何あてに成るものか【一重】そんなら何ぞしろと言なんすのかへ【幡】インヤ手前が不承知なら彼是いねへがよもや忘れいしめへ野暮らしい言譯だが手前手を一寸見せろといつてもそんな嫌みな事い嫌とけんもほろ〳〵の挨拶ゆへ荒だて〳〵入癡の詮議するもとそれなりに濟したが今夜いちばん流れの身にも塵芥のねへ所を濯ぎあげて水ぎわを立て見せろ【一重】いッそ口惜い【幡】なせだ【一重】ハテよく〳〵な譯なれバこそ言にくいおめへさんにはしたねへ事をお頼申いしたから心まで勤をしていィすか何ぞの様にうたぐりなんすと思やァ何にも入いせん腹が立いすく様子なり向き泣【幡】何もそふ腹を立て泣こといねへ理の當然だ【一重】ハテよくつもッて見なんし總て盟をしいすのい互に心をうたぐる故昨日今日の中でい有まいし何もわかつて居なんしながら何のかのとじらしなんすが腹が立が無理かへ【幡】手前がなんぼさふいつても萬一の事が有た時後日に云ぬけをして置ねへけりやァ外聞が悪い【一重】夫と云ふも金のむしんから起た事もふよふおす金も入いせんたこなふりを見せろ【幡】金を貸ねへからとてかふ言かゝつていうたぐりい晴ねェ

一重ハ暫しふさぎし様子も常色仕立の密ゆへ定めてかふ云ふ事もあらんと覺悟なれバ用意の剃刀を何れよりか取出し何も物いわず枕へあて指を切らんとせしを

櫛 これ何をすると止る **一重** 私が心の一筋をお目にかけいす **雷** 茶に取上げ剃刀そんな事でハ指ハ切ねへ〳〵去ら〳〵しい野暮をする事ハねへハテ可愛手前を両方の指迄なくさせかたわにするもわんまり色氣がねへそして又起證の髪のと貰た處が腰張にも野暮らしく入髪にもされねェすれば益もねへ事だ夫よりか己が望ハ外にある **一重** 何でおすへ **櫛** ない無理にまくり手此町處まで書てある文里二世の妻を消て明かにおれが名を其通り彫替てもちいたい

隣座敷 **文里** おれもかふ零落れバ悪い事ハした事ハれへがどんな災難であついめを仕よふもしらぬ人の行末といふ物ハ知ぬ物だ非様な事を思ふと活て居る心ハれへ **花琴** 馬鹿らしい哀れッぽい事をお云いなんすかへ

一重 成程腹も立なんせう今迄隠しィしたハ私が悪ふおす是にハ段々譯が有いす先氣をしづめて聞ておくんなんしお前さんのお出なんせん前より年久しく世話に成いしたが私ゆへ今でハ不都合になん〳〵したを今更どふも見捨られぬ義理ゃァ爲方なしに前の様につきやつて居いす故何とか思ふ者もおすせうが儘ならぬハ浮世でおす

隣座敷 **文里** 成程浮世ハこしらへ物だ早く悟る方が一のてだ **花琴** 今更馬鹿らしい何ざんすへ

櫛 其譯をバよく知てる初の程ハ手前も眞に嫌がつたさふだが段々世話に成義理に詰てまんざらでもねへとの事ハテ隠しやんな去年の春出た谷峨が作の二筋道といふ本ハ手前が文里を嫌がる處から迷ひ出した迄書てあるせそりやァどふで承知で來るのだ（此言葉ハ文里不男ゆへさゞ）ハ突出させる工みなり手前も廓で一二をあらそふ女郎だがわんまり智恵がねへ

せ文里の文の字ハ尊が面を見てハ二文が物もねへ成程手前もよつぱど茶人と見べるせ

隣座敷 文里 サア〳〵もつとづきやく 花琴 其様に君なんしてハ悪ふざんすなぁ

一重もむづ〳〵とすれ共こらへ隣の唐紙をじよふだんの様に煙管で敲きながら

一重 いやらしい事を聞のもソレね苦界だと察しておくんなんし 櫃 一重詞の端理づくならんと乗りかねきて義察した計でハ置れねへ爰に至てハ何程あんな男でも用捨ハならねへ彫物ハいふに及バず手奇麗に突き出て見せろさふしねへけりやァ落付ねへ

隣座敷 文里 サて〳〵放せ帰るこれ放せと言のに 花琴 おかへし申いしてハ叱られいす

一重 隣へ聞へふに氣のみぢかいやァ爰を能くみ分ておくんなんし言にくいお前さんへ言むしんとも知ず金ゆへ落魄なんした文里さんを突出

たと言れてハ仲の町へ聞へても私が恥うおす又お前さんとても金ゆへ自由になんすと人の口だから評判がありィしてハ名もすたると云ふ物でおすすれバおめへさんなり私なり心にもねへ事を言わりやうよりモウ少しお待なんし何かしよふもおすせうナ 櫃 何も其様にかばいだてをする程氣が濟ねへ彼是なしに突出てさへしまへバ如何にも此五十兩ハ渡して遣ふ幸今夜も來て居る様子だ何もあんな猿に其様に心遣する事ハねへやァ能くあいつが面を見や疱瘡跡だちけでほんとふの顔ハちつと計はつちやァ出てハいねへせそして女房子迄あつてずッとはかねへ裏店住居の喰ふや喰ずのお旦那様だせ何も敵役を見る様にかふ並べる事もねへが又氣を殘す事も有めへ

一重 ハ始終こらへ〳〵しが最早此何に金の事も何も悪ハす

一重 畢竟文里さんの事に入バこそ夫程惜い金ならもふ入いせん此上ハ何もお隠し申事もおすせん文里さんの男の悪いもお時さんと言ふ

おかみさんや二人迄子の有ことも何もかも承知の上で惚て〳〵惚ぬきゝじた夫だに依て嘗さんの弟のと無へもしねへ嘘をつき義理を欠愧しい事も悲しい事も又おめへさんの様に己惚を出しきつて嫌らしい事を言なんすを辛抱して聞もみんな文里さんの爲に成金の都合だと思ひすけれど假染にも文里さんの名べどふまあ炙がすべられェすが黒くつてい行末が覺束ねへもふ一ッたゝいたらどのよふな事を言物かへもふ〳〵〳〵聞もけがらはしうおす【幔】手前もそふ詐僞をふも知ぬなんぼ綴〳〵の垢染たを着たつてさふ心迄おちぶれる物かェあんな野郎いとつちでおさきに遣ふさへ外聞が悪ひにおさきに遣ふとい餘程ふとい物でいざらぬか餘人は知らず此權なぜいさふい虎の門だ落付顔にせけ共此上いめつたに油斷が成ぬ紙入へ此金も先かふ仕廻てと夫からかふ内懐へ入てちやんとして置だと言ふし【一重】私よりおめへさんがふとひと云ふ物でおす文里さんの男の惡ひを見

くびッて突ださせうとの下心でおすせう私がやふな者でも其位な事い初から知て居いす假令どのよふな事が有ても活て居てい思ひ切れいせん【幔】イヤ己もあきれてお臍と尻子玉が入替て雷と川虎がまつくせ成程てん〳〵の好といゝながら屎の虫も小金虫も虫と云ふ字は一ッなれどむさいと奇麗い糞と金金といふ字に引されぬ手前の心い尊が糞の様な男に惚るい蓼喰ふ虫よりよつぽどひいろて糞喰ふ虫も好〳〵だが手前もふびんや體が臭く成るだらふぞ【一重】何とでも言なんしお前さんに云れると思へば腹が立が文里さんの事で言れると思やまた此上にどのよふな辛い事が有てもつらいとも何共思ひィせんさらが可愛い男の所へ行きいせう【幔】モウ夜具べ足がひつかゝつても誰も構いてい有めいぞよ後悔するなよ【一重】跡の事い未練らしく氣を揉でおくんなんすなへ今言ふ通り可愛い男の爲に耻かくのい苦界の樂でおすワ

斯いひ放し文里が方へ行しが俳諧に名代の窮風を耐へし甲斐もなく互に顔を見合て

文里 何の事だ 一重 サア腹の立嫌らしい事を辛抱して聞た甲斐もなふ斯ふいふ事なら早く來れバよふおすした 文里 アヽ只さへやかましくいつてる處今度懸が滯ると手前の知てる譯ゆへいゝしほにしてもふ揚ねェすれバ此二階も今夜が見をさめだ 一重 文里も涙がなくひしめさふすれバいつ逢れよふも知ぬ隨分手前もまめで居て己が事も何も案じる事いねへせ兎角おれが方から何れ共沙汰をする迄ハ必短氣を起して呉るなよコレ其樣に聲を立て泣てハ悪い又癇に障ふ全體手前ハ病身で悪い虫が有から灸をバ絶へずすへいつものお醫者の丸藥ハ忘れず に毎日飲ふぞよ 一重 すいり泣 アイ〳〵夫でも何ぞしたら逢れる事も出來ませうかね 文里 ハテせかれる位じやアてへ〳〵氣を付る事じやアねへ又一寸顔を見た位でハかへッて思の種だおれもぞふで氣が濟

ねへから逢れぬ迄もこゝらをまでつゐて居からまめで心安い女郎衆が仲の町へ出る時でも頼んで文の通路ハして呉ろよ 一重 一夜逢ねバ百日も逢ぬ思ひの常でおすに今宵別れていつの日に又お目に懸られいず限もなく何を樂み何を力に此世の愛を凌ぎイせうマアぞふしたらよかろふ

ト愚痴も口舌も眞實も此期に何のわかちなく只言かハす言の葉も言んとすれど隨られ名殘の涙絶間なく猫行末を繰出せバいとゞもつる〳〵心の糸破るゝ胸も縫兼て針も藥も通らぬハ持病に強きさし込癇文里ハ猫も當惑に一人の介抱心元なく呼立聲に二階も下も何事やらんと驚付て醫者よ藥と立騒ぐはや東雲の烏啼鶏座敷ハ手を拍き

若イ者 ハイ 繼 もふ歸るから茶屋を呼にやつて呉ろ

縄に降くる雨ぞふくく

○第四 任侠の寸丹

一重は今は文里に別れ悲しさの積り〳〵て癪となり今日此頃はろ〳〵に食さへうすく〳〵と人に逢さへ氣むづかしふうつら〳〵の其中にも文里が事のかたきしも忘れかねたる病の根側に氣をやむ花の香の日頃に實の猫婚で何ら何迄奥底なふ心を付て慰れど涙先立眞實の看病一人

花の香おいらんへ此傾城買猫の卷とやらい此春の新板で女郎の嘘の直しれる本とやら讀ひせうかへ其様にふさいで計まんまもろくにおあがりなんせず薬と言へばいや〳〵と若内所へ知たら悪ふおすせうどふぞ些づゝもまんまも薬も呑でおくんなんし何を便に早く愈く成いせうと思ひなんす一重へ今新しく云ふでいおすせんが知つゝ苦勞をさせいすを腹も立なんせすおめへさんの様に眞實にしておくんなんすい嬉しいと中〳〵日や何かで言て盡る事でいおすせん併し私が事い文里さんに別れる時直に死ふとも覺悟い極めていイしたが言置なんした事もありせふぞもふ一度お目に懸りイした其上で死のを待て居いす身此様に私が様な物不知に實を盡しなんして煩いぬ様にしておくんなんし色〳〵お咄申て頼で置いす事も山〳〵でおすが馬鹿〳〵しい今からと思ひなんせうかと耐へて居いす花の香涙なおそれ其様に心細い事ばつかり言なんして若もの事でもおすしたら私い何としイせうはんに斯いふ別をなんすならなまなか結んだ神さんや佛さんが俱〳〵恨しふおす一重いッそ昔の年はも行ぬ時の心なちこんな苦勞も文里さんをあんな身にもさせもふしイすめへ此頃いッぞふなんした事やら様子を聞てへにも便音信占迄も留られ人傳さへも嚴しく云付なんした故今い通路も絶切て猶忘られぬ胸のせつなさお時さんが羨しいぬしの側での苦勞なら百倍増ても厭いせんアレてふいふ内も日頃から誰彼の隔なく呉葉に迄もそれ〳〵に人あいそうもとりなりも忘れよふと思つても目にちら〳〵と見へる様でぞふも少の間

も忘れイせん

ト又さめ〳〵と泣沈む一重が心花の香が餘所ごとならず身にとめて共に涙に袖濡す亭主い病氣の氣がゝりに何心なく來かゝれば二人の樣子只なられど何くハぬ体にもてなし

亭主ぞふだ今日の樣子ハ花の香泣顔をかくし

がりなんせん亭主夫ハさん〳〵だが我慢してちつと喰ひなせェさふすると藥も廻りが早いぞふもはかぞらぬがチット醫者でも替いよふかの一重いゝへぞふかちつとづゝよい樣でおす亭主いゝかへそんならまあ氣儘がいゝがぞふか心のせいか己が眼にハいつもより顔の色も惡いよふに思ふ又何ぞ思ひ出したのじやァねへかへ尤勤の內の樂ハ誰が身の上にも有る慣ひだがあんまりこり過るせいゝ加減にする物だ併しかふ言た迚さふ差引のなる位なら惚もしめへが誰かれの差別なくみんなのかげで斯いふ暮をしてゆく己だものを手前達を奉公

人とハ思ハぬ子と思て居から惡かれと思つてハ言ぬ中にも手前ハまだ頑是もねへ時分に兩親に離れ兄弟迚もねへとの事便少い身の上とハ云ひながら一ッハ緣か一方ならず不便に思ひ十六の春の突出もかわいさふに今から苦勞をさせる事かといつその事に十七八迄も引込て置ふといつたなれど其時分もふ丈恰好も備れば外の女郎への聞へも有と無理にみんなが勸むる故せうことなしに出したれば突出しの其日よりアノ文里さんが附しつた故何も不自由もなく苦勞も渝く直に內所の手も離れ人にハたてられ評判よく其時ハおれハてへ〳〵嬉い事でハなかつた其長い盛の文里さんがあゝいふ身にならしつたもみんな手前ゆへ其恩のある人をなんぼ斯ふいふ商賣でも今になつて堰くとハあんまり分らぬ物と思をふが花の香も側に居るふせうだ己が心いきを聞てくりやァノ子が大分こるのヤレもふおしつけ中の町へも出られぬ樣に成の何がこふしたぞふしたと言立ハさま〳〵だけ

れどがわいさぶに今せき立をしたらばァいふ一圖の氣だからひはッと煩が出やふか短氣な事でも仕ねしめへかと夫を案じて一日〳〵と延して置がお際遣手が云ふにゝ假令勤の金が滯ちず共とゞの詰りゝおいらんの身の薄く成事ァ、云ふ事をせかずに居てゝ外の女郎衆へのしめしがきかぬ抔とりきみ切て云ふをァァ〳〵と言延してもはてしなけれが世間が濟ず又一つにゝ文里さんの爲なり手前がふびんさ故おそまきながら堰いたのださふでもして遠ざかつたら思ひ切事も有ふか成丈ゝ互の爲ゆへ思ひ切せふと思つたがさふ懸こがれて痩衰食もろく〳〵喰ぬ程惚ると云ふも能〳〵深い惡緣だらふが又愛をよく聞てくりやァ其二世も三世もと言かはした文里さんと言へば子迄なしたる女房も有ど手前の色香に迷ひ子の事も女房の事も思はず通ひに通て其果ゝかゝらふ島もねへ身の上に成しつたとやら其文里さんの女房さんの心にも成てみやどの樣で有ふと思ふ涙ながらき夫に

愛想つかしもさッしやらず里方の諸親類でゝそんな不所存者に添して置事ゝならぬと歸れ〳〵と度々の催促をさッしやるさふだが尤子にひかされての事でも有ふが其詞を用ひぬとて是も腹を立かみさんも義絶との事夫でも手前を恨むとの咄も聞ず只夫大事と貞女を立貧ひ活計も苦にもせず賬かゝ知ぬが此頃は袖乞に出さッしやるとの噂を聞と胸が一杯に成て飯も喉へも通らなんだどふぞ余所ながらみついで上てへにも何所に何してどんな人かも顏ゝ知ず心を痛て居る其實氣な女房を手前がどの樣に思つても追出されもしめへまあ第一ゝ世間が濟ねへ昔の身ならばてかけ妾と云ふ事も出來よふが一人づゝも口を減さねば成ぬ時節手前が其處へいつた處が道行ゝ出來ずとゞの詰りゝ此世で添れぬと無分別ゝまのあたり其時の歎きゝ一人や二人の事でゝねへぞよ又思ひ合て二人がはでに死で一所に往たとてがァ〳〵危ねへ運の上其心遣ゝ承知の上の事だから能ひやふな物の又此

世で非業の死を遂た故其憎しみで牛頭馬頭と云ふものに引下られ何地のどこへ別やふやら江戸の中でさへ知ぬ手前達その時逢たく探しても音信て呉る者のなき地獄の住居こつちで思ふとゝ了簡が違ふが手前利口だから辨て居やふがよく此間違が有たがる物よ文里さんだッていつ迄ァ、した事でも有めェちつと親類衆の眼にとまる樣にさしたら元の身の上にも成ッしやらふ又其時ゝどふかこふか有縁なら成もせう兎角短氣を起さずに氣を取直して病を早くよくしや爰を辨へれバ其苦勞ゝ昔語と又來る春の花の顏笑ひ合ふのを陰で聞てへかふ云ふも面白可笑く身勝手な異見と思あふがさふいふ卑び心ゝさら〳〵ねへ是も云ゝずとゝなれ共手前の心安めだから言がッレ手前年季入た時より今迄證文も書換させずに置ゝァ、文里さんの事で年季を入れるな可愛さふにと思ふゆゑ文里さんとても一通りにゝ思ゝぬ客人恩がへしと云ふ迄もねへがいッそ己が小遣の内を貸べいひぶ

んなしに内所で濟と外の聞へをも思ふ故ずる〳〵べつたりと勘定なしにする積も恩にかけぬ己が心の曇ぬ寸志ァ〳〵長だんぎゝ病氣の障に成てゝ惡ひソレ花の香もとく〳〵氣を晴させ何ぞ喰ふ樣にすゝめてくりやァサァ〳〵往つてきやせう氣を付なよ

ト跡に心ハ殘れども外の聞へを憚てそう〳〵下へ行跡ハ只伏拜む計なり

一重 さふとゝ知ず恨いした事の勿体ない堪忍なんしも半分にて頻にせきくる涙川

折ふし隱居所の勤の鉦かん〳〵〳〵

○第五 離憂の夢飛

一重ハ醫療を盡せども其奇特あらずして日增に重る戀病の進まぬ食事も文里より贈れし品と偽れバ一口づゝも執る箸の夫さへ今ハ絶〳〵て人の見分もなき中にも文里の事の明暮に忘れかねたる迷ひにや

一重 文里さん私しも一所に參りいせうと手出す 花香 モシおいらんへ何

をなされます文里さんい居なんせん物をそんなに身をもがきなんす
と猶身の弱りになりいすはんに其様に見さかいのない様になん〳〵
しても文里さんの事を思ひ詰てお出なんすかへ

トわッと計に泣出すあたりも共にもらひ泣

吉のおめへ迄が其様に泣てばッかり居なんしていかへッて病人に障
いすにへアレあんなに何かなんすが文里さんに何ぞする心持かチい
ッそかわいさふでざんすと下から口の花香折角泣めへと思ひイしてもソ
レおめへさんが其様に泣なんすものをどふ耐へられいせう何卒後生
だから泣しておくんなんし あすかの旦那さんも見るめもかわいさふ
だアノ位に思つて居る事なら一寸でも添して遣てへと云なんしたせ
めて迷ひぬ様に息のある中文里さんに逢せうと此間中から探しなん
すの

言葉もいまだ畢らぬによふ〳〵文里が隠家より引連立て逢すれバ嬉て一

重が煩ふこと風の便に聞へしがよもやかふこハ神ならぬ身の知がたく一
目見るより物なも云はず暫時涙にくれにけるどれ〳〵と涙をおさへ

吉の文さんのお出なんしたといつたらアノ様に思ひ詰なんす物だか
らひよつと氣がはつきりとなんしやうも知れぬ早くお知せなんしな

花香ハイ〳〵もしへおいらんへ文里さんがお出なんしたにへ
ト云ふ聲耳に聞へてやあたりうろ〳〵見廻す様子文里ハ側へ立寄て

文里コレおれだよ文里だよアヽアなさけねへ様子にハ成て呉たなア

花香あんなに手を出しなんすハお前さんに抱れてへと云なんすので
おすせう文里そんなら下の方を持てくんな

トそつと抱上一重ハ何か文里の顔をしけ〳〵と見てさも嬉げにこ
笑ひいつに變りし機嫌顔

花香アレあの様に嬉がんなんす様子ハ
ト哀彌増床の側文里ハ耐へし溜涙ふけバこぼれ拭へバ漏てバら〳〵と自

然とかゝる手向の水泣伏す此方の心より笑ふ一重が心根のいとゞふびん
に胸迫りかわで見る目もいじらしさ

文里 どふぞ藥が有ならやくにゝ立めへが己が手ながら呑せて見てへ

花香 たゝめ出すさァおあげなんし 文里 藥だよ是を呑ぬとの早くよく
成ぬよト口へあ 吉の あれ見なんし何しても飲なんせん藥も文里さん
があげなんせゞ旨さふにたべなんすワナ 文里 當惑の顔つきにてどふぞしたら
又よく成事も有ふかの 花香 どふぞよくしておあげなんしな あすかの
馬鹿らしひ文里さんが醫者でゝ有めいしどふされなんす物か
ト泣つくどきつする此始終みな作者の夢にて側に見るも氣の毒に思ひて
やもしへ三ぶさん三ぶさんと起されあたりを見れバ
福富樂安御慶申入ます勿体らしきオボン〳〵

二筋道三篇宵の程序

二筋道も三ッ合て六筋となりこれ三絃の連彈にひと
しく祇る糸の戀中解るのも戀縺るゝも戀延るも切る
も習なれゞ本調子の手琴に二上りと登れゞ三下りと
おろさるゝ階子六段からのたんどりゝたとへ古近江
の名作といふとも心も亂れの淫蕩さに合せものも離
れ〳〵と稚調の鬧熱なる音色もつひにゝ砧の寂寥拍
子まで皆谷峨子の手附にして流行文句ゝ眼前にソレ
手にとつて見給へと息勢張て草紙亭顔へ習ひ殘しの
妄言書を爰に序す

序開者

先夏冬の床の初夢に
　春午の新板も事る古
後篇は去未のとし歳毎榮智我恵顔初め
三篇は此申のとし

其戀中は　紀伊國や文里や
　三浦や一ト重筆

異見の文ゝ

二筋道三篇宵の程

七情ゝ人に備りたる尊とき物なれど心を情に奪ゝれてゝひよんな處へ義理だても迷ふ互の仇心より出來ものにて遂にゝ身を亡ぼす事眼前御身達の上にありけよふかと覺へ善悪の二筋道ゝ右と左のさかひ總て善淋しく悪賑ひ候方ゆへ落入やすき人心に候まゝ此處よく〳〵御勘辨あるべきため善の意の危きを書たるも長きゝ悪からんと名目にめんじをかとめけ

梅暮里谷峨

總目錄

第壹　行にゆかれぬ己か身の迷の闇のあや
なきもまさかに義理にからめられう　其頃
かぬ心も浮くふりゝ二みちかけして　云兼る藏の貧居の白雪
いせつにおもひきつてもそれぞとゝ　除

此段は

第貳　泣になかれぬ戀うたの契りし事も口
まめに噂ばなしもうさはらし氣を引　其頃
たつもくがゐだけふたみちかけるし　成兼る長青樓の白雨
んじつに振りはらふてもかへろとゝ　相

此段は

第參　引にひかれぬ三味線の糸より細きや
つれはぎしたふ御方へ遠ざかりおも　其頃
ゝぬ人の横れんぼふたみちかくるお　切兼る收井里の初嵐
はゐのさんゝきれても三のいとゝ　玄

此段は

第四　いふにいはれぬ親と子の間もうき世　其頃
にへだてられけふゆるされしかんど　見兼る生市中の春雨
うも年賀のをりを幸とふたみちかけ　病
るよろこびに下戸上戸でも酔ぬとゝ

此段は

二筋道三篇宵の程

谷峨作

○第一　冬のだん

新古今集に契おくことこそ更になかりしが兼て思ひし別れならねバと心驚かれ是程に思ひし事も日に〳〵疎きハ世の中の常なれども是さても又上べの戀にや文里ハ一重に別れしより月經れども忘れがたく朝に起ても暮るを知らず風せわしき夕暮の軒端を鳴す風の音さへいと物憂く病にかゝらまれ案じる妻のやるせなく行屆きたる看病の雪につけ雨につけ思ひ過しハ互の涙先立ことバの邪魔ながら

文里　これ〳〵お時マア其樣に深切にして呉る程余所〳〵しく禮ぜころでゝなけれども思ひ廻せバ廻す程我身の罪の惱しくたッた一人の心から多くの人の憂苦勞親達もさぞ憎ひ奴と思召さふ其罰で今此ざ

主夫といふのもアノ一重日に〳〵難面はじめのうち態と通ふも男の意地がついした事より深ふなり引に引れぬ心の迷ひ剩おれが事より病づき一日嬉きめもさせず此樣な別も今更何とも思ハぬと其中のこなたの愛艱難ますい心と愛想もつきず一方ならぬ深切に仕馴もせぬ手鍋業それもみんな己ゆへと思へバおめ〳〵と面目ない此生面を會せうよりいつそ病がもとゝなり死で仕廻バこなたや小供等又浮むせも有ふかと只それのみを願ふにぞイケ歳をして馬鹿よ愚かと笑わひで手前勝手の事ながら何事も皆前世からの約束での此惡緣とも思ひ直して堪忍して呉ろ

トそゞろ涙にくれけれバお時も初の片言ながら

要お時　ナぜ其樣ないまハしい事おつしやります夫の爲ゆへ愛き艱難ハ女房の役それが何の珍しかろふそりや又お前の隔の心一重さんとの深い中口々告たる人さへも憎ふ思ふハ初の中燃立憎氣も押沈むる

もお前が大切さひよつと無分別でも有ふかと恨みつ泣つ案じるハ如何な夜毎もかはらねバ頑是もない鐵でさへ不審に思ふかして前や後へ絶付覗きこむのもいじらしさに思ひ直して口先で笑ひに紛らし寢せ歌を涙に聲のうるむのを知せぬ胸のせつなさに翌日逢ふたら此つらさ何から先へ言出さんと思ふ怨もまさかにお顏を見てハ見すぼらしく昔に變るお姿と思へバ憎氣も何所へやら何時かハ嬉ふて朝夕も一所に暮す事もやと夫を樂み二人の子を守育てるも女の手一つ苦勞ハ同じ一重さん一日安堵の思ひもせず生死しれぬと別かるゝ悲み一所に居て俱〳〵にお前を大事にするならバ何程か嬉しからふニはん に昔の御身ならバ仕樣もよふも有ろふにと不斷心にたへねども我と等しき人なけれバ語り聞する便もなく心で愚痴を繰出す計此樣に思ふて居ますに私が前をかね繕ひうかぬ心もうくふりに隔ちるゝがわしや悲しい日に〳〵痩衰の塞も增る病根ハアノ一重さんの別れより

とそりや言ずとも知てわれど世にある時さへせぬ悋氣のなんぼ女の慎みでも今迄耐へいたされませぬ何様な憂き數々もせめて咄す中ばかりも氣の晴るのは誰も替りに有まいに何故斯々と打明し氣を晴すのも苦勞をも一所にして下さりませぬ

ト實あらわれて勤くにぞ

文里 何から何迄殘る方なき其心底今更貞實なこなたを見かへ死だか生たか知れもせぬ隔たる田舍の一重が事なにしに思ふて煩ふものか必あじに氣まづく思つて呉めいよ 要 氣まづく思ふ位なら初から此憂い見やしませぬが私が慾目か知ねども何一つぬけめなく仲間中にも立られて智恵才覺まで施した其お前も今其様な御身に成ていい愚痴に心の結ぼれるいさら〳〵無理とい思はいでよふ察して居ますがお歳よられたお兩人様に能耳を聞せまするがまだしもの御孝行と女子だてらに出過るも氣にあたらば堪忍してうき〳〵として下さりまし

文里ハ言句の云譯も涙に物を言せぬのみふつと目覺て鐵吉ハ兩人の顏を覗き込のを悟れしと

文里 鐵やよく起きたのト云ます 鐵吉 ナゼ其様に爺さん嗅さん泣しやる坊が惡くば堪忍して是からい大人しくする程にモウ泣て下さるな

ト子どもながらも何事かと案じる心に宥める文里夫婦も耐へても耐へかれたる泣顏にて

文里 何鐵の惡い事い微塵もない惡いと云ふい只一人みんな己が心から頑是もない坊主に迄案じさせるいよく〳〵な箸にも棒にも掛らぬ者の親にナゼ其様な孝行の子やこなたの様な貞實者がめぐり來るといやッぱり己をばまじめと思へば〳〵我ながら我身の上に愛想盡跡の歎を思いずばいッそ死たい〳〵

トとり亂したる男泣死と云ふのハ子心にも思ハしく思ひてやわつと計に泣いだす

文里　堪忍しや〳〵死んせぬ〳〵お初が起てん悪いモウ泣きやんなよ
コレ〳〵お時壺の菓子を遣てくりや　妻　サア〳〵是を遣からだまん
な　文里　アヽ悪ひ事をいつて鐵に迄泣せた憎ひ爺さんだノウ　鐵吉　憎く
ない可愛い爺さんだものを　文里　此樣な者でも親と思へばこそ其樣
にいたいけに言て呉るがこの親ん子と思はぬやら此苦勞をさせるも
涙のみ心一つの皆迷ひ　鐵吉　爺さん此菓子ん坊を可愛がつたあつちの
おばさんの呉たのによく似ているの　文里　チヽよい物覺だソリヤ竹村
の最中の月と云ふ菓子だ　鐵吉　爺さんあつちのおばさんの所へナゼ此
頃ついきなさらぬ坊も一所に往たいノウ　返事をせぬ故ゆコレいきた
いよ〳〵

トせがまる、程猶なみだ夫の心思ひやる文里も妻の顔見ながら

文里　アノ坊を可愛がつたおばさんん田舍へいつて死だか生たか便が
ないがどうでわの大病でん全快とん思われぬ今頃ん土の下へはいつ

たで有ふヨ　鐵吉　ナゼ　文里　きい〳〵が悪くつて死でしまつたろふよ
　鐵吉　アノ死とん　文里　死とんノせつない苦いもので坊にも最ふ逢れぬ
ノサ　鐵吉　おとつさんにもか　文里　チヽ此とヽにも猶のこと　鐵吉　夫じや
アいやじや〳〵〳〵　ト泣出す　文里　おばさんが聞たら嘸嬉がろふがどうも
爲方がないだまりや〳〵　鐵吉　爺さんと嗅さんとアノお初とアノおば
さんと不斷一所に居たいものを　妻　ホンニ辨へなき心にも一所に居
て暮したいとんヨウいやつた世が世で一つ所に居らるヽならしばし有て
モウ〳〵泣きやんなおばさんの病氣も早く能なると又爺さんの御勘
當も免りさふすると又どうとも成コレ〳〵袖をだいなしに濡したサ
ア着せ更ましよ　鐵吉　アノいヽ衣物を着のか

トいふ頃つく〳〵見詰る母浮む涙を呑込て

妻　世につれるとん云ながら木綿布子の洗張何の是がよい着物ぞな
んぼはしこひ生れでもさもしく暮せが心迄さもしく成が不便ぞやモ

ウ〳〵其樣な外聞の惡い事いやんな爺さんの御勘當さへ免りれずに
んな着物ゝ見せもせぬ今少の中と辛抱しや 鐵吉 さうすればよいべゝ
が着らるゝか 要 着らるゝとも〳〵 鐵吉 モウいくつ寐るとよいべゝ
着て又おばさんも泊りに來なさる 要 モウいくつ寐たら逢るゝ樣に
成事やら其樣に樂んで待甲斐もなふなるならば 鐵吉 其樣に泣から嘘
か 要 何の嘘でゝないのふ十ヂト十はど寐ると何もかもよく成 鐵吉
さうしたら爺さんも何所へも出ずに內においでよ 文里 ヲヽ居るとも
〳〵こなたや鐵が言葉の端々あてゝ云ふとゝ思ゝねど自然と此身に
ひし〳〵と釘を打るゝよりまだ愛い言ふて返らぬ是迄の過り改むる
のゝ古人の敎今より迷ひの雲晴て白日を見る如くなる我心モウ〳〵
一重が事ゝふつゝりと口へも出すまい懼ろしや〳〵

トロでハ云へど心でハ問音信の其人さへ若や一重が便かと案じる脈の鼓
かれ要のお時ハ猶更に心迫ひハ病の仇といろ〳〵に心慰めてしはかどら

ぬのハ氣惱の餌と知ながら

要 モシ〳〵私が一つの願が有が聞て下さりますかへ 文里 一重が事か
あれが事ならモウほんに思ひ切ている 要 其一重さんの事なれど思
ひ切てもらふてゝどふも私が氣が濟ぬあの子とても田舍へ行てより
よいとか惡いとか何所からぞナットゝ便も有さふなものとどうも案
じらるゝ定めて病人のお前ゆへ面倒でも有ふなれど床に計ついてる
でもなく只氣むづかしいぶら〳〵病なれば一寸なりと廓へいて樣子
を聞て安堵させて下さりまし 文里 何を云ふかと思へばたつた今思ひ
切たと云ふ口の下から馬鹿〳〵しいそして便のない方がまだしもま
しで有ふよ 要 夫だから事を分て私がお願ひ 文里 それだといつて 要
また是程の願ひゝ聞てよさそうな物でござります 文里 まだ遲くもな
い事さ何から何迄ぬけめなきてなた一重ゝほんにあやかりものあだ
に思ふと罰があたる 要 これと云ふもお前が大切 文里 夫程迄に此馬

鹿を慕ふと云ふも皆悪縁 妻 煩ひ合程惚るも悪縁 文里 モウ言てくりやんな 鐵吉 嗚さん寒い 文里 イヤ又雪が降て來たさふだ佛壇の燈火をつけやれ 妻 ハイ

火を打つける音カチ〳〵〳〵

○第二 夏のだん

世の中の義理も恥辱も辨へぬ有程胸の苦しさに妻のすゝめも幸に病ふの足の道はかも心ハ近き格子先それと見るより口々に呼立顔を見合せハ過し事のみ思ひやり目に持つ涙夕立の暫し霽間もなかりしが稍あって

花香 文里さんよふお出なんしたね・・ア何からお咄申いせうかお目に懸る人も有いすが今仲の町へ參いしたッアおあがりなんし 文里 己もあがりてへが茶屋の前も氣の毒なり又内所へ對しても上りにくい 花香 ナニ内所でも文里さんが樣子聞にひよつと御出なんしても只お歸しもうしてハ悪ひから内所の客にでもして上もうして酒でも上て呉ろ

と云付て置なんした故よふおすからお上りなんしな 文里 そんなら上つてもよかろふかの 見世の女郎 サア〳〵おあがんなんし 文里 みんなも早くあがんな 女郎大勢 後程へ

ト互の捨言葉と踏共に暖簾押開二階へあがり元より噂の止む間なき文里が事なれバ我勝に駆付見ても痩衰たる其姿に只涙ぐむ計にてたま〳〵咄すも面々に悲き事も拾ひ出し哀に絮問は盛せぬ事と若い者の計ひ座敷をもはや片付んと涙隔てる機轉者 若者 先あちらへお出なされましと其間に手早く床をさり屏風片手に引出せバ盥をする音サラ〳〵〳〵

丼床のだん

花香 文里さんッアよく來られなんしたチほんに一日でもおめへさんとおいらんの噂をして泣ぬ日ハおッせんワナまア夫ハそふとお前さんもおいらんにお別なんしてより兎角氣むづかしくお煩ひなんすと聞いしたが今程ハどふでおすへ 文里 見る通りにやせ衰へた 花香 アイ

サチエいッそ顔なぞゝお痩なんした文里イヤもう夫につけても色々つらひ咄のみ花香アイサさうでおッせうとも私も噺が山の様に積て居ます文里マア一重にあゝいふ別をしてより日頃の思ひに百倍増し外聞の悪ひ事なれど男らしくもない此様にぶら〳〵煩ひ内外のものに苦勞をさせたりねへでおめへ方に迄案じさせるを脇目から見たら馬鹿なたわけとゝ愚かな事人間とゝ思はれめへ夫におめへも可愛がつて呉た鐵めも己が此様にぶら〳〵するをはしこい奴ゆへ一重が事で煩ふと思ふやら可愛がつたおばさんゝどふした〳〵と氣を慰めるやら案じるやら其言はるゝ度々にはんに子共に迄苦勞をさせると思へば又夫が苦に成てどの道病氣ゝはかどらぬ筈だよ又お時も此様な者を夫と思ふかして只大事〳〵とされる程生てる心ゝねへゝナあっバてしいッその事死だと知れたなら坊主に成て廻國せうとも思ふさうすれば二人の子共やお時ゝ親父の方へ引取て世話をするだらふ夫でゝあ

れも少ゝ苦も薄くなる夫に付ても便が聞てへよ花香おめへさん方の中でゝ中々かりそめの事でおすッせんから無理とゝさら〳〵思ひイせん必々とり詰なんしてあじな氣にでも成なんして笑はれものに成なんすなへ

ト來し方の事ども思ひ廻せバいさゞ哀を催す折から今宵の新造八重梅先より爰へ來りしが障子の外に委細を聞振袖顔へ押當て忍び泣する其聲の漏聞へてや

花香其所に居るのゝ八重梅さんでゝねへか八重梅アヽ花香サアヽ〳〵おはいりなんしな八重アイ〳〵花香此子ゝ馬鹿らしひ泣ずともサアサアお這入なんしな引入る手を取おめへの不斷戀しがつた文里さんだから思入にお咄なんしな八重夫だからさつきから爰迄來て居いしたが嬉ひやら悲ひやらではいり兼て居いした文里此子ゝ見馴ぬがいつ來たの花香此子の事につけてゝ色々悲い咄の有事でおすッア面貌ごを

らふじィしナ　文里　どうか一重に似て居る樣だの　花香　アイサおいらんの妹でおすい

ト聞と文里も飛立思ひながら

文里　マアどふ云ふわけか合點がゆかぬ尤一重が田舍へいつたことい聞たが親兄弟い死絶たと言つたけがさ　花香　アイサお咄申も涙の種おいらんの病氣の中も旦那さんもおかみさんも殊更便少い者だからかわいさふだと眞實に介抱しておあげなんした緣と云ふ物い不思議なものでおす內所へ道具好な田舍の人が心安くお出なんしたが或時言ひなんすにい私が村から與一と云ふ者がお豐と云ふ子を此內へ賣た筈だと云なんしたら旦那さんが夫い一重といつて私が所の一番ものだが此頃い大病で困りやすと言ひなんしたらそりやァ可愛さふな事だせんてへあのお豐ぼういおらが方の者じやァござりやせんあの子も知めへが上總道中の曾我野在の者だが親知らずに私どもが村へ貰

はれて來たのさ夫い〳〵兩親が可愛がつて眞の子の樣に育あげた處がたしかあの子の七ッの時なさけなくも同じ年に親達い死絶へ夫からあの子い與一と云ふ伯父が手にかゝると直におめへの方へよこしたさふだ親達の死だ事もお豐ぼうが賣られた事も隔つる國の事なれバほんの親里の方じやァ知ますまいと云ひなんすを聞なんしてからそりやァ何よりな事を聞たと喜びなんして親里へ遣たらひよつと又煎豆に花の咲事も有めへ物でもねへとつておめへさんに逢せなんしてよりそう〳〵詮義して爺さんを呼寄せ長い年季の事ながらむづかしいあの病を聞バ實の親子ださふだから引取ていかつせへ愈なれバそつちの仕合おれとても共々よろしふ假令死んでも心よく往生させてやらつせへと渡しておあげなんしたら嬉しがつて泣てばかり冥加の程が恐ろしいとて此子を代に連て來なんしたけれど旦那さんいさうした事でい決してねへと色々に云なんしたをどうぞ願ふと聞屆け

す無理に置て往なんしたゆへ爲方なしに名代の座敷へ計出しなんすん文里聞バ聞程かさなる哀そしてこつちへ來る時分ん姉さんんどふだつた花香ソノよふに泣なんせずとも委細に文里さんに咄なんしなん八重ァイ〳〵文里其樣に云兼るん姉さんん死だと言のか八重イヽヘ文里そしていヽか八重イヽヘ文里やつぱり死だをおれに隱すのかナァ花の香さん花香いヽへそうでんおッせんよ文里そんなら泣ずと早くいつて聞せて安堵させやな八重ァイ〳〵旦那さんのお情で在所へ歸なんしてもよいお醫者とてもなく只お頼申しいすん神佛ばかりと種々に手を盡しなんしても何の奇特のあらバこそ日に增し重る其中にもほんに片時おめへさんの事を言なんせん事んなく自由に成事ならバ今ん姉さん計でんおすせん親達迄もおめへさんを慕ひ泣て計居いす何卒いつて逢てあげておくんなんし假令死なんしても兩親の心やすめと思つてもおかみさんの前もありどふぞいヽ了簡んおすせん

かへ文里何のいヽ了簡どころか惡い了簡さへ了簡の文字にんきらはれ果た今の身の上そして田舍にんいヽ醫者でも有か八重イヽヱ江戸迄ん十里餘も有いすから人手んなし仕方なしに田舍の醫者さんにかけいすからていヽ心細い事でんおすせんそして姉さんに惚いしたかして嫌な目付をして脉を見いすからいッそ憎うおす文里病人に惚ても仕方が有めへがそして何歳位だ八重三十七八の色の白い嫌みらしい醫者でおす文里ァヽ何にしても困た者だ花香夫でも此樣に久しく病の峠を越へたから能なりなんす事もおすせうとも思ひィす文里あヽした病氣ん床に着とむづかしいに其上こつちに居た時分から人の見さかひもない樣に成たものを何して能なるものかとん諦めても未練な心からんひよつと田舍へいつて氣が變たらいヽと云ふ便も有ふかと日々に夫を待あかしてもなしも飛礫もなき故に來にくいのも顔を押拭ひ來て見れバ思ひ寄ぬ一重が眞實の妹に又廻り逢て樣子を

聞バモウよく〳〵

トあと云さして涙川渡かれたる心底ハ汲つ汲れつ泣くどくあまりの歎き

に八重梅ハ目もはれ齒をも噬り心も亂れていく瀬の思ひ氣も流るれバ花

の香の留め兼ながら

花香　八重梅さんモウ泣なんすな兼ておいらんの咄にゝおめへも強い

癪が有と不斷案じてお出なんしたに其樣に泣てからひよッと癪で

も起つてゝ悪うおすせめておめへ計も丈夫にして兩親方に安堵させ

てあげなんしな　文里　これ〳〵モウ泣てくりやんな花の香さんの云ふ

とはり癪が起つてゝわるひサアだまりや〳〵　八重　アイ〳〵

ほんに姉さんを花の香さんが眞實に世話をしなんす又文里さんとの

深い中ゝ誰言ふともなく村でも評判文里さんなり花の香さんどふい

ふお方といつぞゝお目に懸りたい〳〵との念が屆けバ此樣な悲しい

ことでお目に懸りイせらとゝ思ひイせなんだはんに無禮ながらおめ

へさんや花の香さんゝ逢はぬ前から兄さんとも姉さんとも思つて居

いすゆへ西も東も知れぬ此廓へ來るもお前さん方を力にして來て見

れバ此樣に深切に言ておくんなんすから嬉しひやら悲しひやら涙が

出いすものを　文里　さう思つて呉るさへ嬉しひせ是からはんの妹と思

ふからさう思つて居やとゝ云ものゝ今から云ふざまで兄弟とゝ心計

で思ふのみァゝ果敢ない身にゝ成果た　八重　はんかへ嬉しうおす姉さ

んが聞なんしたら嘸悦びなんせうと思へバ　花香　コレ又泣なんすかは

んに姉妹とゝ言ながらよく似て居なんすから此子を見るにつけても

おいらんの事を思ひ出されて悲しうおすァゝいつのか晩でおつした

アノやふに煩付なんしてからおいらんの言ひなんすにゝ愧しい事な

から委しい譯を知なんせん人々迄がよく異見をいつてくんなんすを

隨分仇にゝ聞いせん又お時さん迄も憎うゝ思ひなんす筈なれど今迄

少も恨みらしい事もなく度々文や人傳にも頼む〳〵との事ばかりは

んに私が心も誰も同じこと故嘸案じなんせうと無理に勸めて一日二日お歸しもうしいすとお時さんも少ゝ心やすめと共々嬉しくゝ思ひながら又あんまり中がよすぎてひよッと私が事をバ忘れもなんせうかと又夫が案じられはんにあさましい心ぞと辨へて見ても戀しさの忘れ兼たる此病是程私が思ふても男と云ふ物ゝ氣散じな羨しいもの私が思ふ十分一も思ひなんせん其證據ゝ文の通路も止にしてつちへも來なんせんかして誰も逢たの咄もないが私ゝどうぞ一寸なりとお目に懸り咄したい事もありかう隔りて顔形せめてゝ聲か足音でも聞ことならぬ今の身の上結ぶお世話ゝ神さんにお頼み申ゝもふしても斯く中割ての悋氣まで御頼み申ゝせぬものと私を相手に色々泣つくどきつ言ひなんすを馬鹿らしひ又逢れぬか何ぞの樣に氣をはつきりと引立なんしと叱てみれど心根を思ひ廻せバおいらんより側で見る目のせつなさにッィ泣明さぬ夜とても數へる樣でおすハナ 文里 お

れとても其通り何でもねへ事が氣に成て腹を立たり立せたり初の中ゝ手ごとぞとつくる心もいつしかに誠の愚痴に成果てまんざら爲になる客とゝ明し合ふたる上なれバとゞゝ互の身の爲とよつく承知で呼すれどちよつとした意氣張から突出させるゝ幾度か客の付間もないに從ひ次第に積る二人が中むぎどうに引割れ文さへ通路の成ぬのを一重ゝ委しく知らなんだか 花香 アノ樣に酷しくおわき(やり)どんが申いしたがお前さんもお知んなんす通り成る丈ゝみんなが通路をしてあげ申いしたけれどモウ〳〵喧しく吟味だて其事も何も隨分おいらんも承知でおすがついした事にもぬしの名を言ふのも暫しの憂晴し此上ゝおいらんも能なりんしておめへさんも晴て逢れなんす樣にと其時ゝ鹽斷やら酒斷やら座敷や部屋又新造衆や禿迄皆てんでんの身の上をお頼み申神さんに願を懸いしたが其樣な事をせぬ者と言て出たゝおわきどん計でおすハナ 八重 ホンニ苦界と云ふものゝつ

らひ恐しひ物と誰も廓へ來ぬうちハ畏怖れていゝすけれど誰々とても其樣に眞實に我身の樣にしなんすハ文里さんハ果報者アノ姉さんハ仕合者愛敬が有餘り果報やけでの憂き煩ひホンニ浮世と云ふものハナゼ意地の惡ひ物でおすか人さん方の夫々に深き契の中割ずと思ひ合たる其中を思ひの儘に結ばせたら何所も彼所も丸ふゆきイせうにホンニなまなか神佛の思ひ思ハぬ別ちなく結びばなしが憎うおす

文里 其樣な事聞につけ己が身にとつてハテエ〳〵嬉しい事でハない併し人と云ふ物ハ樂しみ有バ悲しみの有ハ覺悟の上ながらてまへ勝手な慾痴も出れど又是からハ能い事の有ふも知れぬと祝ひ直すをしはにして己もモウ泣ぬからおめへ方もモウ泣て呉めへよ 花香 私も泣顏をお目に懸いしていいとゞおめへさんの氣の結ぼれる種になるすれバおいらんに對してハ不實と思ひすに依て隨分氣を引立てあげ申いせうと思つても此子と二人忍び泣にばつかり泣ていイすからおめ

へさんにお目に懸りイじたら何でも思ふ事を思入言て泣ふと樂しんで居いした此子もおいらんの妹とハ云ひながら能く物が分りイすから猶悲しうおす 文里 さう云へバおれも同じ事だがいつ迄いつても果しがねへ又お時や子供が案じるからモウ〳〵思ひ切て歸らふよ 八重 文里さん其所ハ能く聞分て居いすが又と言ても定めて出にくうおッせうから今宵計ハお泊りなんして夜とゝもに姉さんの噂咄に氣を晴させておくんなんしな

泣はらしたる八重梅が其顏しげ〳〵見て

文里 アゝモウ何も言ふまいと思ふけれどアレ〳〵あの形恰好ものでし迄一重が留るに生寫し過去し事ながら今宵ハ内へ歸らねバ惡いと思ふ其時ハ無理と知つゝ腹立させッレを手にして歸らふと氣强く振切かけ出せバ 花香 おいらんの言なんすには夫程お歸りなんし度バ尋常におかへし申いせうが譯も言すに腹を立無理の有丈言ひつのり愛

想盡させ切よふとれゝりヤおめへさんにも似合なんせん淺はかなさ
むしい心でおすとふるい聲に成ていひなんせバ文里心の中でハ困れ
ども家が悪ひも初のうち今更其樣ナはたらきのネへ言譯もまさかに
仕にくゝコレ其樣に言ひたい事を言ちらし口へつぎあてがひをする
なよと強みを言と花香悪ひ事が有ならバ誤るまいとハ言ひせんに誤
らせるが男の高下かう言ひしてハ如何でおすが悪ひ事といつてハお
前さんに惚たより外の事は有いせんと腹を立て言、なんせば文里ワリ
ヤアおれに惚たを後悔するか花香後悔もしいすのさ何の惚ずにいゝ
したらお前さんもお時さんも苦勞が有めへと思へば文里そんなら是
からは心を改たと言事か花香改めても濟いすかへ文里うぬが樣な浮
氣な心でハ殺さるゝ事も氣が付ず人の意見で有めへし花香人の意見
で思ひ切らるゝならからッきし惚ハ仕いせんと泣ながら言なんせバ
文里此奴が口巧者な事を言と埒もない喧嘩にみが入て肝心の歸る方

角も忘れ花香私共迄が取さへるやら何かして無理に床へおさめ申て
も文里何か其夜ハ解兼て只まじ〳〵と短夜も長き思ひに明し兼漸々
別れに近よれば互に折て、もかう〳〵と言ふ間もなく別となり花香お
前さんのお歸りなんした其跡は塞でみたりじれなんしたりしてまだ
氣に成か長々と文を書そう〳〵中宿へ出ている位でおすせうヨ文里
しかも其時の文が爰に有てんな別をする成ばあの樣に世話もやかせ
めへ物をせめて是でも餞ならバ慥に死だる一重が身には經文よりも
能い功德

ト繰出す涙の細々と

思ひ過しよりハまさかに積ることの葉も互のふしに隔りも早言告
鳥の聲に初て驚かれし樣に覺へ只管の詫に和らげられし心と心な
らねば筆とる間遲しと硯に向ひながらも餘り深ふ思ひし故にこそ
はしたなき事のみにて御氣に逆ひ候へども是しきの迷ひハ御叱も

有まじくと此事にハ苦勞も游く去ながら暑さの折柄いつ〳〵より
も遲き歸らせにいとゝ御身に劇しくあたらん事をとはかなき我身
よりやるせなく案じられ何事もいかふ大事を取候心からハ過し盟
にまがひなふなんでの事までも御聞濟の上なればよもや御忘は有
間敷候兎角御身ならでハ任する方ハ此日本に外にあらず

ト讀下すのも文なかバ何時かハ更て丑滿の二階もしんと物凄き一重が姿
目の前に文里ハ不審に氣も付ず只逢ふ事の嬉しさに

文里　ヤ、一重かどうして何時の間に　一重　おめへさんに逢たさに　文里
ソリヤおれとても同じ事今も今とて三人して手前の事で涙をしぼり
少ハ憂を晴さんと取ひろげたる手前の文　一重　夫があんまり嬉しさに
共々憂を語らんと夫で爰迄來いしたに花の香さんなり八重梅なりコ
レ知らぬふりする事ハおすせんハナ　花香　チャおいらん　八重　姉さんか
ト二人ハ夫と悟りしゆへツット堅立なげくにで

337036

　一重　デモ此子達は仰山な花の香さんにハ何から禮を言ふやらいつに
變らず文里さんを能くしてあげておくんなんす又私斗か妹迄世話に
しておくんなんすモウ何にも申いせん嬉しうおすにへお梅もはんに
私ゆへにいかい苦勞をして呉るの併し何時に變らぬ旦那さんのお慈
悲にて床の苦患はないとの事せめておめへは御恩を返しておくんな
んし此上部屋か座敷でも持やうに成たならバ客をよんでも氣隨を私
が眞似をせず意地張事や義理づくもまた夫々の付屆も切はなれが悪
いと笑はれて人の上にも立れいせんにハ假令世話をする人がおッし
ても私と思つて花の香さんをバ如才にせずよく慕て聞なんし何樣な
むづかしい譯合でも能く捌きなんすとて仲の町でも譽めへすにハ兎
かく恩を知らぬと私が手本でおす此上ともに花の香さん妹と思つて
氣を付て遣ておくんなんしお頼み申いすにへホンニ馬鹿らしい程な
つかしいハ文里さん私ハ此樣に思ひイすが又お前さんハナンヅ面白

いことが出來ぬせぬかと案じれば猶逢たさの心の儘に泣てなと氣を晴さんと思へども枕並ぶる親達の聞んものをと夫さへも枕にかくす憂き涙少ゝ不便と察しておくんなんし 文里 其心ざしは嬉しいがそんな榮耀な事でゝチへ愧かしい事だが手前に別れてから此樣に 一重 イッソ痩なんしたがソンナラ私ゆへ煩ておくんなんしたかへ 文里 内外の者にも言紛らしてゝ居れど逢てへ〳〵が積り〳〵て此病 一重 思ひゝ同じ籠鞄の岩と水とに離てさへ隔たる心でおすものを假初ながら一年もコヲ別れて居りいすに逢たうなふて何とせう假令形は隔たる共心と心は少しの間もせめて離れず夢になと見る中ばかりの樂みも夢と知せば覺ざらしと思ふ心のはかなさをお前方も推量しておくんなんし 文里 そして病氣はいゝかの 一重 アノ馬鹿らしい此病假令神佛さんの御利生でもなか〳〵能ならふとゝ思ひイせん私が事ゝ兎も角もおめへさんてそ少も早く能なつておくんなんしホンニ自由に成こ

となら私が命も一つにしていつ迄も御壽命を保たせ今の苦勞を忘れさせ申たいと思つても夫さへも儘ならずと種々心も亂れ果この病をして居いす 文里 只さへ悲しき此時節ナセ其樣な哀な事言ふて呉る思ひなしのせへか何やら手前は 一重 おめへさんが戀しさに迷ひイして耻かしい此姿をお目に懸いす必愛想を盡しておくんなんすな言度事ゝ中々に盡せぬ事と知ながらわけて短き夏の夜のアレモウ鶏が鳴いすゆへ

飽ぬ名殘の是非なくも見返々行かと思へバ何時かハ姐と消失る文里ハ命更心付たさへろゝ筋さてもせめて影さへ留るなら寫す鏡に慰めむ返せ〳〵と呼はろを何事ならんと遣手のおよし驅付見れば三人ハ夢の中にて泣叫を氣を付られて顔と顔ホットの息に時移す

文里 正しく一重が今爰に 花香 私もキットおいらんの 八重 もの言ひかはす姉さんは 文里 死だと云ふ知せで有たか 花香 ソンナラ迷つて 八重

出なんしたか【やりて】アノ馬鹿らしい夫い皆衆の迷ひの夢夢い逆夢よい便を【花香】聞か【八重】聞ぬか【文里】善悪とも苦勞の絶へぬみんなの身の上【やりて】ハテ苦勞のないと云ふものが生ある物に有ませふか

薄聞き雨靈郭公の初音てッぺんかけたかホト、、、、、、

○第三　秋のだん

さらでだに秋ハ物憂き夕暮の別て淋しき片田舎露の命も漸々と一重も今ハ親里に心もいさゞ病ふの床思ひやらん方もなく虫ならで誰に問れん獨寢の四方の嵐を聞じにも薄尾花の風の波此所もさへこそ立ぐるる思ひハ僅ず別れし人の事のみに枕うき立つ涙の雨いく方もなく共ゃに母は涙にくれながら

【母】コレ〳〵一重又かいの〳〵少し側に居ぬと何を考へてか其様に泣が大方又彼の人の事であらふ初の中の事ならバ隨分異見もする叱りもするがナンノ〳〵其様に思ひ詰ての其病よく〳〵深い緣じやと

思ふ故おぬしが氣も察してどのやうなお方かと見たさも見たしいッそ側に居て看病して貰ゝ肥立も早からふと今と成てゝ此母も逢て互の挨拶を聟よ姑と言ふならバナンボカ嬉しからふに併し兎角其思ふ儘にゆかぬがやつぱり浮世コリヤわしとも斗でゝない世間一統有て、はか取ぬを側で見る眼のせつなさも又推量しやアノ逸徹な親父習ひ夫をきな〳〵朝夕も憂いこつちの身斗と只さへ薄き食物も涙隔どのさへよく〳〵なおぬしが不便かしていちはながけて神佛れしこと言ふてけなす身が頼みもせぬに闇いから雨風厭はず跣足參の神頼み其お陰やら其様に心も慥に成やつた又妹のお梅とてもおぬしが代に廓の勤をしながらも何か斯かと便音信有につけないにつけ安き心ゝ有まいに若しも死だと便せバ朝も晩も泣あかしあげくの果ゝおぬしが様に煩ふなら此親達は何とせう爰の所を汲分て一ッは心の持様で能なる事も有るもの

ト氣を引立れど一重ハ猶も涙にふし

一重モウ〳〵何も言ておくんなんすな開ば開程不孝の罪勿躰ない事ながら長い年季の其中に知ぬ事とてお二人へ少のみつぎも仕もせいで親子と名乘わはすれば心柄とて此病妹迄に苦勞を懸さむしい勤をさせたうへに恩迄忘た思へば〳〵私程業人ハおッせんホンコ憎いと此體切さいなもう共なさらいでまた此上の御不便ハ却て此身の罰となりいす

母余所外の眞直な親なら知らず何の罰が當ふぞへ產落した其儘で親甲斐もなふ遠國へ親知ずに遣る上に一度の尋ねもせぬと云ひ便りのないハ無事故と又もすまする邪見な親今と成ての親顏で好た男ハ持たせまいと言れぬ義理なれど爰を能う聞てたも文里さまの今の身の上往古に變る乏しい暮しト人々の噂假令病氣でござらつしやらず共アいふ温和に育たお人下々の業ハ出來まいし厄介多の事なれバ定めて賃麻賃仕事多き肌着もお内儀の皆手一ッでする

中に人雇ひして度々の文の便宜の其時は病氣は何か少づゝも能い事や定めて田舍の事故不自由で有ふにより遠慮なく何なりと言て越せとまた其上に身を切る樣な錢金をみつぐ心の深切ハおぬしの病氣がよく成ぬしの病氣も直ふとすれバ文里樣が大切故と辨へ見れバ假令緣が有とてもドウモ一つに置てハ恩を仇さもしい勤をさせた故恩さへ知ぬ畜生と世の人々に呼するのが恥しさに是迄の緣とあきらめて文里樣の事ハさつぱりと思ひ切てたもとまだ遲くもない事を今改て言のにハ命がはりまだ外に得心して貰はにや成ぬ事がある

一四

お時さんの事ならバ隨分心の中でハ辨へていゝすけれど痛飲づらの事ハモウ〳〵言ておくんなんスナ

母ナンノ此母も言たい事ハないが言はねバ成ぬせつぱ詰おぬしを是非〳〵貰ハねバ成ぬと度々手を替へ品をかへて言てゞ有たがまだ遲くもない事と一寸延しに言扱ても昨日ハもハや直催促コレお袋あの樣な正氣もなく十が十一迄もな

い命をアノ廣い江戸でさへ持餘したる難病段々先よい方に成たいコリヤ誰が陰じや已が丹精故じやツヤそれに娘子の事を度々言入てもぬらりくらりと今に挨拶がないよく積て見さつしやい此上四十貼呑れても薬代の取ぬいみす〳〵知ながら是程好な酒を斷て療治に身を入るゝも一重殿を貰はふと思ふ當があればこそかふ浮か〳〵薬を進せる又おれが活した娘なれば已が命も同じ事彼是い無い筈じや夫とも聞届がなけりや爲方がない是迄の薬代ズット負て二十兩今請取ふ夫は出來まいがと憎さも憎き悪口と思へども又よく〳〵考へて見れば神佛の陰陰も有ふが一ッい痛飲さまの療治で助つた其命又二ッにい江戸とい違ひ何事も不自由な片田舎アノお醫者を止て是ぞと云ふ心當もなく夫ゆへ隨分機嫌をとり此樣な事は親の言より愈なつてから御相對がよいと言へば先潜りの痛飲つらのいふには其時に成り娘が不承知との挨拶かと釘を指れ仕方なさに何の左樣な申分は致しま

せぬお前の陰陰で助かつた娘の命假令娘が否と申ても親の威光で是非あげませう先早く全快させて下さりましと言ふたら跡で彼是が有てい悪ひから娘子へも言ひ聞せ得心の返答を聞てから薬も遣ましよトいてぢ悪く言ふを明日い親父も江戸から戻りますゆへ何れ明日迄に御返事を致しませうト言ふたらばきつと待まするとと退引ならぬ無理往生ぞふぞ嫌で有ふが親達を思ひお時樣にめんじて痛飲さまの方へ引取れて全快して下されやト義理と浮世と恩愛に迷ふ心地も親の閑一重ハ何と返答も只泣沈むばかりにて暫く有て涙をふりきり

一重かゝさんへい差合なれど文里さんとの其中い浮氣で惚た譯でもなく互の實の積てい義理も人目もまだな事耻かく事さへ主ゆへならば嬉しい程に迷ひイして勤の中の操だて主に此身を任せてより外の客へいかたきしも一つ癖せで枕元あさる燈火を掻立て長々と書く文の

愚痴夜の深更るのも厭いずにこつちの事にとりかまけッイ腹立せ客人を歸した跡も常なれば氣の毒とも思ひイせん床淋しさの獨寐もせめて夢にと樂みの何時かいおなかへぬしの種耻しひとい世の中の皆言ふ心何がさてホンニ産だら上總屋のわげ卷さんの背に習ひ仲丁を抱きかゝへ茶屋〳〵からも口々に子をあやしたり嬲られたら嬉しからふと樂んだ甲斐もなふッイ五月の流産に闇から闇へ迷ふ子い容づくりも男の子ホンニ育つて呉るならお二人さんにも初孫と見せちらかして自慢して悦ばせたら嬉しかろ假令此上別るゝとも其子をぬしに成かはり守育てゝ暮すなら別れ力も有ふのにひよんなお方のお藥で生いでもよい私が生き今い我身に持餘し苦勞を懸る業人なれど夢現にもをぢけにも嫌と思ふて見たならば少いとりへも有いせうにナぜ私い此樣ナ氣でおすか［母］モウ二言めにい其樣に泣て計くぢくい何も言ひません大事の命にかゝわる事故まづ一旦い痛飲どのに身

を任せさへすれば義理も立孝も立といふもの又夫からいおぬしが心一ッでどうとも成ことサアつい諾と言や〳〵コレ此樣に事を分て云ふても返事せぬい此母を田舍者と侮つて何言ふても聞ぬのか夫じや仕方がナイ固く言付置れし親父どのへも言譯なしいッそ又生て憂めを見やふより此母から先へ死さへすれば事は濟む

ト嗚しすかしつわり口説く

［一重］堪忍なんしモウ〳〵ふッつりと思ひ切いしたに因て其樣な勿体ない事を言ておくんなんすナ［母］ソンナラ聞分て呉たのか［一重］夫程迄に人々に私を能思いせうとのお心い有難いやら嬉しいやら冥加の程が恐しい私が心たつた一ッで圓ふゆく事ならば言なんす通りに成いすから呉々短氣をしておくんなんすなェ［母］そなたさへ承知して呉れば何の短氣いせぬけれど無理無体な事言ふてひよつと迫つて呉るナラ［一重］歡びなんす間もなふ實も留めかねて葉櫻の［母］一重と云

ふ名は氣がゝりの花にも人にもたへぬゝ嵐【一重】散る此身より其お歎を見る樣で【母】悲しい別をするならば老木の父御に朽たる此母【一重】苔の妹花の香さん【母】今埋木の彼のお人も【一重】秋のすがたにあらはして【母】生たつ心も有まい

トかくの愁歎に早や後夜を知する遠寺の鐘玉川の流れ響きうらの方にて蟋蟀の音クサ〳〵〳〵〳〵〳〵

○第四　春の段

花咲春の長閑さの分て眼ふ此家の内年賀祝ふて芽出たさに今日容されし文里が勘當要も子供も親達も憂も開くる梅櫻

【親父】是迄の不孝ゝ言ふて返らぬことおれもはや八十八と言るゝ年に成ど只心悪りゝ其方達や孫等が事賀の祝ひを幸に心底も改つたる事なれば勘當を免してくれと親類中の詫言分て谷峨子のさつい世話ゆゑ聽届て勘當ゝ免したなれど此上ゝ前々の通り親へも孝を盡し商賣

向も油斷なくおれも又今日よりゝ元の隱居になつて樂をせにゃならぬ【文里】若輩か何ぞの樣にお年よられたお二人樣へ是迄の不孝今更申上べくもなく勿体なく御年賀に付御勘當御赦免下され有難ふ存上マス【母】勘當免して禮を言ますゝ嫁女の事あの樣ナ不埒ものに愛想も盡ず貧苦も厭ゝずよく其樣に二人の孫を守育て下され忝なふござると不斷噂して歎で居ますぞへマァ〳〵鐵もお初も愛らしい事わいノサア〳〵爰へ連れて來や〳〵【お時】おぢゝ樣やおバゝ樣だぞや【母】コレ〳〵鐵もお初もおとなしいノ又少しはにかんだと見へるワエ【お時】イエ今にとけると騷で成ませぬ【母】兎角げんきなが能とも〳〵【お時】御勘當お免し下されましてまだ間もなふお願と申ますも餘あまへた事ながら【母】改つた何の事じやこなたの願なら是迄の禮心に聞ましよノウ親父どの【親父】早ふ言ふて見や【お時】わたくし共の病氣も未とかく思ふ樣でもござりませぬがお醫者衆も氣の持樣で直になをると云

ふてゞござりますが其病氣をなをして下さる能藥がござります【母】夫ゝどういふ妙藥【お時】外でもござりませぬお聞及バれもござりませうァノ一重ゞの是も病氣ゆへ田舍へいつて療治なれど元の起ゝ互に別れてよりの病氣故此上一重ゞのをお側に置バァノ子の病氣もよくなれバ主の御病氣も平愈し私も共々心よくなるゝ必定こゝの所をお聞分下されて何卒此願を叶へて下さりまし【親父】何なりと聞氣じやが其事計ゝ出來にくい第一ゝ諸親類又辛抱して呉たそなたへ對し【お時】其思召ゝ有難ふござりますが夫でゝ一人ならず二人三人の命に拘はる事【文里】コレ何を言ふかと思つたら埒もない御勘當が免れバ此上の歡びが有ふか【お時】夫ゝさうでも有ふなれど夫でゝどうも案じらるゝ【文里】ハテ馬鹿をいへ今迄の文里ト思ふか【お時】夫れでも私の氣が濟ぬ【文里】イヤさうしてゝ己が濟ぬ【お時】いや私が【文里】イヤおれが

ト互に義理の問答最中谷峨ハ一重を引連來り

【谷峨】イヤ御兩親へゝ此女ゝ初てなれど兼てお聞およバれの契情一重委細ゝ二筋道初篇後篇に委しけれバ何も申んが取撮んだる處が道ならぬ事なれど兩人の氣惱夫を案じてお時ぞのゝこれも氣惱彼是捌きだてをしてゝ一も二もなけれど只可愛そうなるゝお時ぞの計ゝ誠の道これにめんじて理屈なしに聞屆てわしが娘分にして進せたい側でつかゝして遣て下されいさうすれバ皆の衆の病氣も本復自と家も榮ゆる道理又二人や三人餘計の人が有バとて何もむづかしくもない此身代併し今迄大体分限も定つて有ふに依て下女の代りにでもすれバ濟さふなもの尤親類中ゝ皆承知【親父】デモ夫では【谷峨】何も不足ゝわしに下さい【親父】シテ此女ゝ廓から連て來て下されたのかすれば價が【谷峨】ソレハ少も御苦勞にゝ懸ませぬ殊に此女當時ゝ身儘なれどさし付がましくひつぱらつて參たのにゝ段々むづかしい譯も有ど雨降て地堅るの道理にて打毀して事を計ゝねバお前も承知もして下さるまいし

田舎の關係の方も手が切ぬ聞届てさへ下さらバ何もわしが胸にあるから圓ふ治めて見せませふ【親父】心憎くいでざれどもお世話にめんじて何れとも【谷峨】先ゝ承知でヤレ嬉しや

ト口も引ぬ間に田舎醫者痛飲ハ一重を取れし腹立に耳くちりを引捉て谷峨に向ひ

【痛飲】藥代に取た大事の女能う引拂つてうせおつたナ夫がいゝか是がいゝか

ト切掛る身を捻てひつぱづせバ又振上る腕くび捉へ

【谷峨】コリヤ何んとする小癪なづくにう得心もない女を藥代に無理無体に引き取るゝ色と見せかけ全快せば二度の勤をさせうとゝナット氣がきゝ過る一服八文か十文の古藥種にゝ多けれどまぐれ當りも禮は禮サア請取れ【飲痛】コリヤお金二十兩【谷峨】ナント不足ゝ有るまいが【痛飲】ムゝねへ【谷峨】丸う治まる芽出たさにハヤ奥へ行く年の賀【文里】勘

當免し歡に【お時】一ツ過して氣を晴し一重さんもサア一所に【一重】お二人さんゝ先お先へ【親父】嫁女【母】一重もかへてお花女も【文里】何から何迄谷峨子の【谷峨】其挨拶でゝ痛入る【痛飲】殘念はアノ一重【谷峨】なにヨオを

ト取て頭轉動

【谷峨】お醫者が歸れば女衒となるヨイ〳〵

ト手拍子にて唯子バ痛飲ハ起ながらアイタ〳〵〳〵奥ハはや小うたひ其眠ひ上下の音どん〳〵〳〵〳〵

傾城買二筋道　大尾

明治廿四年六月九日印刷
明治廿四年六月十日出版

〔定價金十二錢〕

發行者　早矢仕民治　神田區宮本町五番地
印刷者　三井駒治　京橋區弓町廿四番地
發兌元　丸善書店　日本橋通三丁目
仝　武藏屋叢書閣　神田區宮本町五番地

版權登錄

●浮世草子

一好色五人女　井原西鶴作　全一冊　定價金十二錢　郵稅金二錢
一好色一代男　井原西鶴作　全一冊　定價金十二錢　郵稅金二錢

近松叢書

毎月發兌　毎冊定價金七錢
毎冊郵税金二錢

新篇大和文範

全部十二卷　毎冊定價金廿五錢
毎月一回　毎冊郵税金六錢

「國民新聞批評」曾て近松叢書を刊行して大に文學に志ある者の便益に供したりし神田宮本町なる叢書閣主は今回更に京橋南大工町十一番地の富貴館主と共に新編大和文範てふ書を出版し毎月一回十二回を以て大尾とする筈にて已に其第一冊を發行したり編中收むる所松田文耕堂及三好松洛合作の御所櫻堀川夜討、近松半二の新板歌祭文、紀海音が鎌倉三代記、竹田出雲の男作五雁金、錦文流の仁德天皇萬年車、幷に金平法問詞にて何れも卷首に作者の小傳を附したり印刷鮮明製本美麗而して定價は金廿五錢

「大坂東雲新聞批評」東京神田宮本町叢書閣にては曾て淨瑠璃本の飜刻に從事し既に近松もの數十部を出版し又現に近松叢書の出版に從事し居れり今回又々出版に着手せる新編大和文範は近松巢林子を除き紀海音、竹田出雲、文耕堂、近松半二等十數人の傑作六十有餘卷を精選し、全部を十二卷に分ち毎月一回發行にて既に其第一卷を發刊せり、一卷には文耕堂三好松洛作御所櫻堀川夜討、近松半二作新板歌祭文、紀海音作鎌倉三代記、竹田出雲作男作五鴈金、錦文流作仁德天皇萬年車、作者未詳金平法問詞等を掲げ紙數三百八十餘ページ、製本も見事にて一卷の正價金二十五錢、全部十二卷完備の上之を近松叢書と合せなば實に淨瑠璃本の一大全書といふを得べし